
本からみつける恋の文字

伊達倭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本からみつける恋の文字

【Nコード】

N6290D

【作者名】

伊達倭

【あらすじ】

恋に興味のない二人が、付き合うことになってしまった。彼らは恋を知ることができるのだろうか。そして、その恋は実るのだろうか。穏やかな春の日差しの中、ゆっくりと物語は動き出す。

第一話 恋人になろう（前書き）

「はじめての×××。」企画に参加申請した作品です。

第一話 恋人になろう

「それじゃあ、付き合ってみようか」

彼女の口からそんな言葉が飛び出したのは、よく晴れた春の日のことだった。

放課後は文芸部の部室に顔を出すのが習慣になっている。

名目上は文芸部員で、あまつさえ部長という肩書きまで持っているので、当然と言えば当然のことなのだが、僕は小説を書いたことはない。それどころか、作文すら得意ではない。専ら読むだけである。

去年の今頃、ちょうど入学してすぐに所属部員がゼロの文芸部に入部したのは、一念発起して作家を目指そうと思っただけでもなく、創作意欲に掻き立てられたからでもない。放課後にのんびりと読書を楽しむ時間と場所が欲しかっただけである。

五人兄弟の三番目に生まれた僕は、家の中に一人で落ち着くことのできる場所がない。二つ年上の姉は受験に向けてピリピリしており、弟達はそれを気にすることもなく元気に騒ぐ。姉の怒号と弟達の嬌声に、唯一の趣味である読書を阻害されていた僕は、最初は図書室を根城にしていたのだが、そこは受験生のための勉強の場で、落ち着いて読書をするところではなかった。

市立の図書館は高校から離れており、毎日喫茶店に通うほどの小遣いもなかった。どうしようかと困っていた折に、廃部がほとんど決定した文芸部の噂を耳にしたのだ。

「文芸部が潰れたら、他に部費が回るし、部室も空くらしいのよ。先輩達が喜んでた」

「ウチの部にも部費、回ってこないかなあ」

増えた部費で何を買うかと相談しているクラスメイトには申し訳なかったが、僕はそれを聞いたその足で、文芸部の顧問を訪ねた。

聞けば、今週中に入部希望者がいなければ廃部するはずだったそう
だ。

「活字離れてよく聞くけど、君みたいな子がいて嬉しいわ」

顧問の若い国語教師は笑顔で入部届を書かせて、そのまま僕を部長に任命した。他に部員がいないのだから仕方がない。部長会議など、色々と面倒な仕事もあるしかつたが、顧問の次の言葉で気にならなくなった。

「少ないけど部費も出るから、参考資料に小説を購入してもいいのよ」

五人兄弟の宿命なのだろうか。小遣いも本の置き場も心許なかった僕にとって、これほどありがたい話はなかった。

こうして、僕は落ち着いて読書をする時間と環境。ついでに資金まで手に入れた。

まず、埃っぽい部屋を丁寧に雑巾がけして、本棚を整理した。先代が何年前に卒業したのかは知らないが、ひどく埃がたまっており、それだけの作業で三日かかった。

それから読書の供として、コーヒードリッパーと、自室のラジカセを持ち込んだ。微かに流れるBGMと、ほろ苦いコーヒ。ゆったりとしたソファ。まさに完璧だった。これほどまでに読書に適した部屋は無いと断言できるほどだった。

そんな僕の城に彼女が訪れたのは、掃除も準備も終わり、いざ本の世界へとソファに腰を降ろした瞬間だった。

「やあ、随分といいところじゃないか」

凜とした声に似つかわしくない、大仰な口調。そこでようやく来訪者に気付いた僕が顔をあげると、ドアの前にすらりと背の高い女子生徒が立っていた。整った目鼻立ちと、流れるような黒髪が印象的で、射抜くような鋭い眼がそれを引き立たせていた。口元には不敵な笑みを浮かべており、その様子からすると部室を私物化している僕を怒りにきたわけではないようだった。かと言って、入部希望

者にも見えなくて、僕は首をかしげた。

「どうかしましたか？」

「ちよつとした見学だよ。潰れたはずの文芸部がまだ残っていると聞いてな」

とても高校生の女の子とは思えない、堂々とした貫禄のある態度だった。彼女は部室をぐるりと見回して、満足そうに頷いた。

「良い部屋だな。気に入ったよ」

「そりゃどうも」

掃除をして、ドリッパーとラジカセを持ち込んだだけが、どうやら彼女の趣味は僕に似通っているらしい。僕は少し得意になって、突然の来訪者に気をよくした。しかし。

「入部することにした。顧問は吉野先生だったな」

「へ？」

不意打ちのような宣言に、僕は少々面食らって彼女の顔をまじまじと見つめた。少しの迷いもない、むしろ非常に楽しそうな目で僕を見ていた。

「なんだ。新入部員の募集はしていないのか。是非、入部したいのだが」

彼女の言葉に、僕は返答に困った。学校の部活動であるから、基本的に入部を拒否する権利はない。しかし、この部室は僕がようやく手に入れた、読書のための環境だった。見た印象ではそうは思えなかったが、ここまで積極的なのは、彼女は創作活動に熱心なのだろう。

「ええと。ここは文芸部ですが、おそらく考えているような活動はしていません。部員も僕一人ですし」

もしも、本気で創作活動をする人ならば、怒るか落ち込むかのどちらかだろうと思って、そう言った。本来はそのような人間がこの部室を使うべきなのだろうが、それも仲間がいてのこと。僕一人がいるだけでは、入部する気にはなれないだろう。しかし。

「放課後にのんびり、コーヒーを飲みながら本を読む。それが活動

だと思っていたのだが」

「……その通り、です」

「そうか。なに、邪魔をするつもりはない。ただ、この環境を私にも分けて欲しいだけさ」

そう言われては、断る術すべがない。僕はなんだか雰囲気ふいきみしろに飲まれたように頷き、実に楽しそうに微笑む彼女を見た。

「一年の雪吹実代ふぶきみしろという。吹く雪ではなく、雪が吹くと書いて、フブキ。以後、よろしく願ねがいする」

「一年の、鷹成誠二たかなしせいじ。小鳥が遊ぶわけじゃなく、鷹に成ると書くんだ。よろしく」

小鳥遊と書いて、タカナシ（鷹無し）と読む。それも珍しい名字なのだが、僕の場合はそれより珍しいという変わり種だった。雪吹という珍しい名字も、彼女らしいと思ったほかに、親近感を覚えたほどだ。

「どうやら、私たちの相性も良さそうだ」

「みたいだね」

以来、僕はこの不思議な女の子と、放課後に本を読むのが日課になった。

雪吹さんは宣言通りに入部したが、恐れていたことは杞憂に終わった。

放課後、文芸部室に訪れて、コーヒーを淹れて、本を開く。のんびりとコーヒーを飲みながら、本の世界を堪能して、下校時間になると鍵をかけて帰る。それだけだ。

最初の頃は自分の城を横取りされたような気がして、気分はよくなかったのだが、雪吹さんは僕と同じく、ただの読書好きな学生で、読書以外の文芸部的な活動は一切なかった。

一学期の頃はただ、同じ部屋で本を読むだけの、お互いを空気が何かとしか捉えてない関係だったが、半年を過ぎると本の感想を言い合うようになり、一年を過ぎ、進級した今となっては、お互いの

勧める小説を読んでは、感想を言い合うのが慣例となってきた。
「ふむ。叙情感というのだろうか。なんとも後味のいい話だ。前半から半ばにかけての、底抜けに明るい話から、後半のシリアスな展開への急転直下に焦ったものの、最後の大団円はありきたりと言え、読んで安心できた。君は、中々面白い本を知っているな」

「雪吹さんが勧めてくれた本も、いいね。ミステリとホラーは相性が良いとは思っていたけど、オカルトとミステリは一緒くたにしてはいけないと思っていた。それが、ここまで完成度の高いものになるとは思わなかったよ」

元々が孤独な趣味なので、あまり誰かと感想を言い合うということをしなかった。それに、雪吹さんの視点は僕とは少し違って、同じ本を読んでも、見ているところが違う。そんなことを話し合うのも楽しかった。

彼女の大仰な口調と、尊大ともとれる態度に戸惑ったのは、最初だけだった。よくよく考えれば、彼女の口調は小説のそれによく似ていて、普段から親しんでいるものである。

勧誘どころか、部活動説明会にも出席せず、めでたく新入生ゼロとなり、僕たちは相変わらず、ずっと読書をして放課後を過ごす。多分、卒業するまでずっとこのままだろう。それでいいと思っていた。

「少しは、目に見える活動をしてもらわないと困るのよ」

だが、そんな僕たちのささやかな楽しみは、顧問の吉野先生の一言で危機に立たされることになる。

「小説や詩を書くだけが文芸部じゃないから、創作活動をしろとは言わないけど。せめて感想文や、批評会なんかはしてもらわないとねえ。他の部にも示しがつかないし」

活動実績のない部活動を存続させることはできない。それは実に真つ当な理論だったから、僕は頷くしかなかった。

部室に戻り、雪吹さんに説明すると、「ふむ」と呟き、何が面白いのか、にやりと笑った。

「ならば、感想文にしろ、批評会にしろ、やるしかないな。この場所には気に入ってるんだ」

「そう言うと思ったよ。ついでに、御丁寧に吉野先生が課題を出してくれた。これを読んで読書感想文を提出しろってさ」

吉野先生に手渡されたのは、一冊の恋愛小説と、その読書感想文を募集するというイベントのチラシだった。

高校生向けの企画らしく、これに応募すれば、少なくとも活動記録にはなるだろうという話だった。雪吹さんと僕は、顔を見合わせたまま、やれやれと溜息をついた。読書感想文は確かに面倒で、あまり面白い作業には思えなかった。しかし、この文芸部を失うことに比べれば、大したことではない。

問題は、その対象。つまり、手渡された恋愛小説のほうにあった。タイトルは聞いたことがある。少し昔に一部で高い評価を受けていた、高校生男女の織りなす、恋愛における葛藤や苦悩を描いた作品だ。恋愛というテーマながら、そこには真剣に生きる高校生が描かれていると噂で、この手の企画が持ち上がるのもわかる気がした。

ただ、非常に残念なことに、僕も雪吹さんも、恋愛小説を今まで読んだことがないのであった。というか、そもそも、恋愛をしたことがない。思春期真っ盛りであるはずの僕たちだが、恋愛にまったく興味がなかったのである。

この事実、今までの僕たちにとって非常にありがたいものだった。若い男女が部室ですつと二人きりなのである。雪吹さんは美人なので、もしも僕が他の同年代のように恋愛に興味を持っていれば、今頃は読書どころではなかっただろう。雪吹さんにとってもそれは同じことのように、つい先日「恋愛には欠片も興味がなくてな。おかげで読書に集中できていい」と笑っていたばかりである。

つまり、僕たちは恋愛という非常にありふれたテーマに、何ら興味を覚えることができないのである。そんな二人に、恋愛小説の感想文を書けと言われても、何を書いていいのか皆目見当がつかない。「批評会にしないか？」

「駄目。吉野先生が用意周到に参加申し込みしちゃったらしい」

本人は「そそっかしくて、つい意志も聞かずに用紙を送ってしまったの」と言っていたが、目は確信犯のそれだった。活動実績のない文芸部を存続させたい一心での行動というのは、彼女の必死の表情でわかった。故に、言えなかったのだ。部員全員が、恋愛に興味がないので書けないなどは。

「まあ、文章の巧拙こうせつぐらいならば、書けるか」

「それも駄目らしい。感想はあくまでもストーリーに関してらしい。ちゃんと規約に書いてあった」

どうせ、僕たちと似たような状況の誰かが、文章に関しての考察なんかを過去に送ってしまったのだろう。最後の逃げ道すら失われて、僕たちはいよいよ迷った。

ありきたりな一般論で固めるという手段もあったが、吉野先生が最後に一言「やるからには、何か賞を取りなさい」と言っていたので、これも却下となった。本気で書くしかないという状況である。

しばらく、文芸部内に静寂が訪れた。穏やかな春の日差しが僕たちの気持ちとは裏腹に、優しく身体を包んでいた。

とりあえず、読むだけ読んで、なんとか無理矢理書くしかないだろう。そんな気持ちを固めたときだった。

雪吹さんは、まるでとんでもなく面白いことを発見したかのように、嬉しそうに口元を引き上げて、こう言ったのだ。

「それじゃあ、付き合ってみようか」

第二話 デートをしよう

「それじゃあ、付き合ってみようか」

突然の申し出に、僕はしばらく呆然と、口をぽかんと開けていた。

「つまり、私たちは恋愛を知らない。だから、恋愛小説を読んでもそれに共感もできなければ、感想も書けない。ならば、恋愛を知ればいい。幸い、私たちは思春期にあり、都合良く男女のペアじゃないか。交際して、恋人らしいことをしてみれば、何やら新しい発見があるかもしれん」

雪吹^{ふいぶき}さんは、まるでそれが名案であるかのようにのたまった。言わんとするところの意味は理解できる。確かに恋愛を知ることができれば、感想だって書けるだろう。

「けど、別に僕たちは好き合っていない。少なくとも、僕は雪吹さんを親しい人だと思っているし、好感も持っているけど、それは読書仲間で、文芸部員としてのことだよ」

「奇遇だな。私もそう思っているよ」

雪吹さんは実に愉快そうに笑って、ゆっくりとソファから立ち上がった。音もなく、窓際まで歩み寄り、そっとカーテンを閉じる。

「何事も、まずは形からだ。案外、本当に好き合ってしまうかもしれないぞ？」

「形から入る恋愛なんて、聞いたことがないよ」

「当然だ。恋愛をするために交際するのだからな」

なるほど、完璧に目的と行動が逆転している。僕は少し考える。恋愛について、興味がなかっただけに、知識は乏しい。しかし、年頃の男女の集う高校に通っていれば、恋愛の話題などいくらでも耳にする。伝え聞く恋愛とは、お互いを想い合い、心が通じた上で成り立つ、とても甘く、切なく、高尚なものだと聞く。間違っても形から入るものではない。恋に恋する乙女がこの事態を聞くと、さぞ

かし怒ることだろう。恋愛を馬鹿にしているのか、と。

「まあ、それもありかな」

ただ、残念ながら僕は甘く切なく、それでいて高尚な恋愛を知らない。ゆえに、形からはいることに、さしたる嫌悪感はなかった。というか、形からでも入らなければ、一生知ることなんてできないだろう。

「よし。ならば、私たちは今から恋人同士だ。よろしく」

「ああ、うん。よろしく」

妙なことになった。そう思いながらも、たまにはこんな出来事があってもいいと納得してしまう自分が決して嫌いではなかった。

こうして、この日。僕は生まれて初めての恋人ができた。否、できてしまったというほうが正しい。

僕たちは早速行動に移した。恋人らしいことは何かと話し合った結果、まずはデートなるものを試してみることにしたのだ。僕たちの乏しい恋愛観は、その答えに至るまでに一時間を要した。

幸い、交際開始日は金曜日で、翌日に二人して出かけることにした。場所は僕が決めることになっている。なんでも、そっちのほうにデートらしいから、ということらしい。

さて、どこに行けばいいのだろうか。そう思ったが、ここは初心に返ってみることにした。そう、僕と雪吹さんが恋人となった原因である、一冊の恋愛小説である。高校生男女の恋愛を描いたこの小説は、間違いなく参考になる。

僕は学校帰りに書店と喫茶店に寄り、二時間ほどを一杯のコーヒーで粘り、件の小説を読破した。

「……なるほど」

僕はとりあえず小説の行動をなぞってみることにした。まずは、明日の待ち合わせ場所と時間をメールで送らないといけない。どこに行くかも送っておいたほうが親切かとも思ったが、主人公はあえて報せなかった。不親切なヤツだとは思ったが、折角なのでそれも

真似してみた。

翌日の朝、十一時。僕は駅前の広場にやってきていた。勿論、人生初のデートのためである。

小説の主人公は待ち合わせの一時前に到着して、ひどく落ち着かない様子で時計を眺めていたが、僕は五分前について、ぼんやりと雪吹さんを待った。五分前行動は僕の美徳の一つである。

「やあ、お待たせ」

かくして、十一時きっかりにやって来た雪吹さんは、相変わらずの男らしい口調で、不敵な笑みを浮かべていた。

ただ、いつもと違う点は、彼女の服装が制服でなかったことだろう。僕のイメージでは、雪吹さんはラフで動きやすい、シャツにジーンズというスタイルだったのだが、その予想は大きく外れていた。淡い桃色のワンピースに、おしゃれなハンドバッグ。サンダルとハイヒールを融合させたような履き物は、確かミュールと呼ばれていたはずだ。

「初デートではこのような出で立ちがいいという、友人の助言だ。どうだろうか？」

「イメージとは違うけど、似合ってると思うよ」

実際、雪吹さんの言動と態度さえ気にしなければ、その服装は不思議なくらいに似合っていた。いや、当然といえば当然かもしれない。彼女は上背があり、スタイルも良く、容姿も整っている。似合わない服装のほうが少ないくらいだろう。

「鷹成君も、中々映えるではないか」

「そうかな。まあ、とりあえず行こうか」

自分の服装に大した興味はない。姉に見繕ってもらった服装を素直に着ただけである。

「そういえば、まだどこに行くか聞いてなかったな。デートということで、それもさもありなんと思っていたが」

「うん。まあ、大した所じゃないけどね。映画を観に行こうと思う」

姉に話すと、あまりにも定番過ぎて面白くないということだったが、せっかく定番になっっているのだから、それを逃す手はなかった。小説でも、確かに女の子は少し呆れていたが、あいにくと僕たちは呆れるほどの知識も持ち合わせていない。

「おお、それはなんだか、とてもデートらしいな」

案の定、雪吹さんは呆れるどころか、納得の表情だった。

かくして、僕たちは駅前広場から歩いて五分ほどのところにある、けっこう大きな映画館に足を運んだ。現在公開中の映画は七本。ホラーと、サスペンス。アクションが二つと、ラブストーリー。それとアニメが二本。雪吹さんの好みもあるだろうし、敢えて決めてはいなかった。

「デートらしさを突き詰めれば、ラブストーリーなのだろうが……果たして楽しめるかは微妙なところだな」

「僕もそう思う」

これはデートなのだから、デートっぽくしなければならぬ。それはそうなのだが、本来のデートとは楽しむべきものだとも思う。つまり、何の感想も言えないラブストーリーよりは、他の作品の方が僕たちにとってはデートに相応しい。

「サスペンスはどうか。けっこう評判も良いみたいだよ？」

「うむ。そうするか」

結局、僕たちはサスペンスを選んだ。デートというのはどうやら男が奢るものらしいが、僕たちは割り勘にした。一応、奢る覚悟と用意はしてきたが、雪吹さん曰く「奢られる理由がない」とのことだ。まったくもってその通りなので、頷くしかなかった。

さて、映画はというと、それなりに楽しめた。

僕も雪吹さんも、小説ばかり読んでいるが、映画も嫌いじゃない。二時間の映画の後、近くにある喫茶店に入り、しばらく感想を言い合ったりした。

「主人公の最後の行動は、何かを隠すためだったと考えられるだろう。だから、私が思うにヒロインは死んだと考えるべきだと思うのだが」

「隠すためだったという可能性は確かにあるね。けど、僕はヒロインが死んだと直結させるには、少々情報が少ないと思う。DVDが出たら、借りてもう一度観てみようか」

「そのときは、名実共に恋人ならば一層楽しそうだな」

雪吹さんの言葉は、起こりえない未来を語っているようで、やはりこの試みには無理があつたのではないかと、ふと考えた。

僕の考えはひとまず置いておき、さてこれからどうしようかという話になった。

初デートの目的は映画を観ることであり、それは既に達成した。

感想も述べたし、もう他にすることは見当たらなかった。しかし、日はまだ高い。

「どれ。少しぶらつくか」

雪吹さんはまだデートを続ける気のようにだ。取り立てて予定もないので、僕は素直に頷いた。

喫茶店を出て、繁華街を歩く。休日ということもあって、人は多い。特に僕たちのような男女の連れが目立った。おそらく彼らは、僕たちのような訳のわからない関係ではないだろう。仲良く手を繋ぎ、微笑み合いながらゆったりとしたペースで歩いている。

「私たちも、手を繋いでみるか」

「え。ああ、そうだね」

すいと差し出された雪吹さんの手を、自分の手で握る。正直なところ、女の子の手を握るのは初めてだ。柔らかくて、小さくて、細い。ドキドキするということはないが、手から伝わる温かさは嫌いじゃない。

「鷹成君は、思っていたより手が大きかったのだな。優男のような雰囲気をも出しているから、女のような手だとばかり思ってい

たが、けっこう無骨なものだ」

おそらく、彼女もはじめて男の手を握ったのだろう。僕の手の中で、彼女の手が遠慮なくもぞもぞと動き、僕の手を吟味している。

「これはこれで、頼もしくて良い。折角だ、このまましばらく歩こうか」

「ああ。そうだね」

お互いの利害が一致したところで、僕たちはお互いの目を見て頷き、宣言通り、ずっと手を繋いだまま歩いた。

普段はロクに入らないブティックや、アクセサリーショップ。僕たちの中では定番の本屋。全部手を繋いだままだった。お互いの熱でしっとりと汗をかいていたが、それを気にするほど、僕たちは他人というわけでもない。少なくとも、名目上は恋人同士。相手の汗を嫌がる道理はなかった。

結局、気付けば夕方になっていた。雪吹さんは部室の中よりも明るく、楽しそうだった。僕も不慣れな繁華街だというのに、そんなことが気にならないほど、退屈をすることなく楽しめた。

もしも、恋愛感情を理解できる人間だったならば、僕は真剣に雪吹さんを好きになっていたかもしれない。こんな日が続くのならば、確かに恋愛は素晴らしいものだ。

このママゴトのような関係が終わるのは、おそらく感想文が完成した、その日だろう。僕たちは、そのために交際しているのだから、だけど、もしも許されるのであれば、この関係をもう少し続けていたい。繋いだ手はこのまま、離れないでいてくれないだろうか。恋しいとは思わないが、この手が離れるのが惜しい。

「鷹成君。ここがお互いの家から最も近い場所ではないか？」

あれこれと考えているうちに、僕たちは繁華街を抜け、住宅街を歩き、家のすぐ近くに来ていた。雪吹さんの家と、僕の家は割と近く、徒歩で十分というところだ。

「今日は楽しかった。そうだな、初デートの最後らしく、何かしら

の記念らしいものがあればいいのだが」

「記念？」

雪吹さんの言葉に、僕は首をかしげる。

「思い出というほどの意味さ。私たちの初デートとして、思い出に残る何かがあれば、それを思い返せるだろう。そういうことを大事にするのが、恋人というものじゃないか？」

確かにそうなのかもしれない。だけど、もう繁華街を抜けて、今は住宅地である。何かを買うにしても、少々場所が悪い。

ならば、形として残るものでなくてもいいかもしれない。そう、たとえば。

「キス、とかいうのはどうか。実に恋人らしい気がするんだけど」
「ほう。それはまた、大胆というか。確かに手を繋いではみたが、親と手を繋ぐことはあった。しかし、キスともなれば、これは確かに恋人同士でしかないことだな」

僕の提案に、雪吹さんは意外なほどに乗り気だった。

彼女の言うとおり、キスという行為は、あまりにもダイレクトに恋人という関係を表している。僕たちのような、真似事の恋人同士が、はたしていいものなのかもわからない。

「もしも、この先に本当に好きな人が出来たときのために、とっておくのもいいかもしれないけどな」

少し不安になって、僕はすぐに反対案も出した。だが、雪吹さんは首を横に振り、僕の顔を真正面から見た。

「このままだと、一生出来ないさ。それに、もしも好きになるとしたら、私は鷹成君を好きになるだろう。ならば、きつと良い思い出になる」

ふと、少し嬉しくなってしまった。雪吹さんも、僕と同じ気持ちだったのだ。確かに僕たちは、恋愛感情を知らない。けれど、もしも知っていたなら、間違いなく相手を好きになっていただろうとも思う。

じゃあ。きつとこの行動は、間違いではない。いや、いつか僕た

ちが恋愛を知ったときに、きっと間違いでなくなるだろう。

僕は右手を繋いだまま、左手で、そつと、雪吹さんの肩を抱きよせた。意志の強そうな瞳が、僕の目を真っ直ぐに見ている。そこに怯えや不安の色はない。

「いわゆる、ファーストキスというやつだな。鷹成……いや、誠二^{せいじ}に捧げるのなら、今の私には本望だよ」

「……僕も、実代^{みしろ}としたい」

ああ、これではまるで。

本当の恋人同士のようなわけではないか。いつか観たドラマのようなワンシーンに、今僕たちは立っている。

すつと、実代の目が閉じられる。薄くリップを塗っているのであろつ、瑞々しい唇に目が奪われる。

恋じゃない。愛でもない。けれど、僕たちはキスをする。ただ、お互いがそれを求めたから。

ゆつくりと彼女の唇に、自分の唇を重ねる。

とても柔らかく、あたたかかった。

第三話 心と体を重ねよう

僕たちの日常は、以前と何も変わらない。

ふいぎみしろ

雪吹実代という女性と交際することになって一週間。相変わらず、僕たちは本を読むだけだ。事の発端である恋愛小説の感想の×切は当分先なので、僕たちはまだ焦ってはいない。

「誠二。以前に借りた小説を、もう一度貸してくれないか」

「うん、いいよ。僕も実代のをまた借りたい」

日常という大雑把な括りでは、確かに変わっていない。けれども、些細なことに目を向けるならば、変わったと言わざるを得ないだろう。

誠二。実代。

お互いの名前を呼び合うようになった。

「そろそろ帰ろうか」

「そうだね」

少し遠回りをして、二人で帰るようになった。手を繋いで。

端から見れば、それは紛れもない恋人同士なのだろう。二人きりの部活動が、恋に発展した。事情を知らない人間からすれば、それはあまりにも納得のいくものに思えるというのが、僕の予想だ。

実際に、実代と一緒に帰るのは楽しかった。本を読むという趣味以外に接点が無かったはずの二人が、今では手を繋ぐという、あまりにも直接的な接点を持っている。

ただ、聞いていた恋愛とは違う。胸がどきどきする。切なくなる。そんなあまりにも陳腐なフレーズを、僕たちは感じる事ができなかった。

「付き合って一週間経つが、誠二はどうだ。私としては、楽しくはあるが伝え聞く恋愛とは違うというのが感想だが」

おおむ

「概ね同じかな。手を繋ぐのも、キスするのも悪くないというか、気分が良いんだけど、多分、他の人のような感覚じゃないんだろう

な、と思う」

キス。その単語を口にした回数と、実際に唇を重ねた回数の、どちらが多いのだろう。

いわゆるファーストキスを経験してから、僕と実代は何度か放課後の文芸部室で唇を重ねてきた。お互いがその感覚が案外気に入ってしまい、人目を憚る必要のない場所にいる時間が長いものだから、半ば当然の成り行きだった。

名実ともに恋人同士。周囲からは交際していると思われるし、僕たちも交際していることをお互いに認めている。手を繋ぎ、キスをする。行為も恋人のそれである。名も実も伴っている。しかし、本来は最も大切であるはずの、お互いの気持ちだけが、重なることはないようだった。

「いつそ、身も心も重ねて、というのもアリかもしれないな」

ふと、実代が呟いた。いつもの堂々とした、自信に溢れた声ではなく、僕が聞き取れなければそれでいいというほどの、独り言に似た呟きだった。

僕は少し戸惑った。それはつまり、セックスのことを指しているのだろう。

恋人同士がすること。僕たちの年齢ならば、特に男子にとっては最終目標と言っても過言ではないもの。

断っておくが、僕は恋愛を知らないだけで、性欲は人並みにある。我ながらよく集めたモノだと思うほどの小説が詰め込まれた本棚の影に、エロ本が数冊、仕込まれている。そういう意味では、実代の言葉は実に興味深い。

改めて実代を見ると、すらりとした上背と、整った目鼻立ち。スタイルもいいと思う。

もし、彼女とセックスができるのならば、それを断る道理はなかった。

「……いいのかな？」

ただ、相応の倫理観も僕は持っている。交際期間一週間。少し早

い気もするし、恋愛感情という根本的なものを理解できない僕たちが、果たしてその行為に及んでしまってもいいものか。

「一応、校則では認められていない。良い悪いで言えば、悪いのだろうな。正直なところ、不安もある。最初はひどく痛いと思うし、誠二にも経験があるようにには思えない。リードなど期待できないしな。こういう性格なので、羞恥心はさほど感じないが、わざわざ痛い思いをしたくはない」

「そりゃあ、そうだろうね」

「ただ、私も興味がないと言えば嘘になる。慣れれば気持ちいいという話も聞く。女の幸せの一つに掲げる人間もいるらしい」

実代は迷っているようだった。提案するほどなのだから、嫌ではないのだろう。しかし、キス以上に、「はじめて」を大切にしなければならぬものだと聞く。

「誠二はどうだ？」

「正直に言えば、興味はある。有り体に言えば、男なら誰でも一度はやりたいことだと思うよ。まあ、恋愛云々ではなく、性欲に従っている気もするけど」

正直に言ってしまうのは、僕的美徳であり、悪癖でもあると思う。もし、ここで恋愛らしいことだと断言していれば、実代は意を決していたかもしれない。

「なるほど。では、また機会が訪れたときにでも、ということにしようか。どのみち、今からするというわけにもいくまい」

実代は淡々とそれだけ言って、それからしばらく、僕の顔を見なかった。

もしかしてけっこう恥ずかしかったのではないかと気付いたのは、家に着いて、私服に着替え終えた後だった。

本来なら、家に帰った僕はうるさい弟たちの相手をしながら、宿題に勤しむところだが、今日は違った。実代から電話があったのだ。『家に帰ると、家族が不在だった。今日は帰らないという書き置き

を残してな。その、なんだ、機会が、来てしまったようだ』

「あ。ああ……そう、みたいだね」

先ほどの会話が脳裏に蘇り、僕は大いに慌てた。実代にしては随分と歯切れの悪い言葉が、電話越しに彼女の緊張を伝えている。

しばしの沈黙が続く。恋人同士の電話ではないな、と思った。

『待っている』

「……うん」

不意に呟かれた実代の言葉に、僕はほとんど何も考えずに頷いていた。

それから、慌てて下着から全部を着替えて、転げるように家を飛び出した。自分でもよくわからないが、とにかく急いだ。呼吸が乱れるのも、汗をかくのも、全部走っているせいでできるから、かもしれなかった。

実代は、学校帰りに別れる場所で待っていた。デートでもないのに、この前と同じ、お洒落なワンピースを着ていた。

「やあ。早かったな」

言葉はいつもの彼女のものだった。しかし、微かに頬に朱が射している。恥ずかしくないはずがない。今から僕たちは、色々な問題を蹴り飛ばして、セックスをしようというのだから。

実代の先導で、僕は彼女の家に通された。手は繋がなかった。

高級マンションの一室。そこが彼女の家で、僕の緊張は余計に高まった。通された実代の部屋は、女の子にしてはあまりに簡素というか、自分の部屋と大差がなかった。

ベッドと、クローゼットと、勉強机。後は本棚が幾つも。それだけだ。趣味と呼べるものは読書しかない。実代らしいと、少しだけ安堵した。

「さて。では、早速だが……しろうか」

「あ、ああ。そうだね」

何をすればいいのか。僕の頭はいよいよ混乱した。アダルトビデオを参考にしようにも、頭が真っ白になって、何も思い出せない。

実代は僕の顔をじつと見据えたままだった。

自分でも、鼓動が早くなるのがわかる。息が荒い。僕は今、何をしようとしているのだろう。恋愛感情を知らない僕が。いや、僕たちが身体を重ねる。それは果たして許されるのだろうか。さっきから考えていたことだけが、ぐるぐると頭を駆けめぐる。

「実代……僕は、わからない。本当に、こうしていいのかな。君は後悔しないで済むのかな。僕はとても、冷静でなんていられない。傷つけてしまうかも、しれない」

熱に浮かされたように、言葉が口からあふれ出す。初体験を目前にした、健全な若者男子の言葉ではなかっただろう。素直に、性欲に従ってしまえば、それでいいはずなのに。何故、僕は立ち止まってしまうのだろうか。

今、このとき。僕が実代を愛していられたならば。そう願わずにはいられなかった。

「……誠二。わかっていないようだから言うが、君は喋るたびに、私の選択が間違っていなかったと確信させている」

「へ？」

「男が盛って、空気もムードも無いまま押し倒された友人の話をよく聞く。それに比べ、君は愛していないはずの私を、心配してくれている」

実代は、穏やかな顔で僕を見ていた。今までとは違う。不敵な感じがする笑みはどこかに消えて、ただ、優しいだけの笑顔がそこにあった。

「確かに、私たちは恋を知らない。愛しているなんて、実に嘘くさく聞こえる。けれど……」

実代はそこで一旦言葉を区切り、そつとキスをした。今までで一番短いキスだった。

「嘘でいい。好きだと、そう言ってくれば、私は……一生後悔なんてしない。誇りに思って生きていくよ」

はじめてのセックスは、想像していたよりもあっさりと終わった。それだけ、僕は夢中だったのだろうか。よくわからないが、痛みを堪える実代にキスをしたときに、彼女の表情が和らいだことだけは、妙に脳裏に焼き付いている。

気持ちが良いとか、そういう感覚はよくわからなかった。ただ、熱い。それだけだ。

「……優しく、してほしかったものだ」
「ごめん」

実代としての感想は、ひたすらに痛かった、とのことだった。お互いがはじめてで、上手くできるはずがない。やはり、するべきではなかったのだろうか。

ただ、実代の仕草がかわいいと思ってしまったのも、抗えない事実だった。美人だとは思っていたが、今までかわいいと思ったことはなかった。決して、得たものがないわけではない。

「……痛かったが、決して悪い気分ではなかった。それにな、好きだと言われるたびに、痛みが少し和らいだ。キスをされるたびに、気持ちよくなった。やはり、後悔などしていない。それどころか、嬉しくすらある」

照れたような笑みを浮かべ、実代は毛布で身体を包み、僕の頭をくしゃりと撫でた。

「誠二……この気持ちが、恋、なのか？」

「わからないよ……ただ」
ただ。

もしそうならば、どれだけ幸せなことだろうか。この感覚が恋と呼んでいいものならば、僕は今すぐにでも、恋愛偏重主義者になる自信がある。

セックスの快感に取り憑かれたわけじゃない。二人が穏やかな笑みを共有できる、この感覚。リラックスなんてしていないのに、と

ても落ち着けるこの空気。

胸が切なくなるといふ感覚など、未だにわからない。だけど、これが恋ならば。

「もし、そうなら。僕は、とても幸せだよ」

僕はそう呟いて、実代と唇を重ねた。

第四話 のんびりしよう

微かな音で流れる、ラジカセの安っぽいジャズの音。

コポコポと音をたてる、コーヒーのドリッパー。

春のそよ風はカーテンを揺らして、頬を撫でる。これ以上ないほどの、最高の環境だと僕は思った。ひたすら穏やかで、心ゆくまで読書を楽しむことができる。文芸部という場所を手に入れることができる、本当に良かったと思う。

「すまない、遅れた」

僕が感慨に浸りながら、コーヒーを淹れているところに、みしろ実代が相変わらずの不敵な笑みで現れた。恋も知らないままに交際をはじめ、あるうことか身体まで重ねたのが昨日。僕たちは土曜日だというのに高校の文芸部室にやって来ていた。

初デート。ファーストキス。初体験。

恋人がすることを通り一遍試してみた僕たちは、改めて、そもそもの発端である恋愛小説を読んでみることにしたのだ。もしかすると、何かしらの感銘を受けたり、共感を覚えるかもしれない。

「コーヒー、いるかな？」

「ああ、いただこう」

鞆を置き、一冊の文庫本を取り出した実代に、湯気の立ったコーヒークップを渡した。

この一年で、僕たちはお互いに小説について意見を多く交わし合ってきた。故に、お互いの小説の趣味は熟知しているつもりだが、それと同じくらい、コーヒーの趣味も知っていた。

実代は、女性にしては珍しいほどの苦党だ。口がひん曲がつてしまうのではないかと思うほどの、苦いブラックコーヒーをこよなく愛している。僕も酸味より苦味を好むが、彼女の好みに合わせるのは無理があった。結果、僕が美味しいと思う限界の苦味にしている。「これもいただくよ」

実代はカップを机に置き、ドリツパーの近くに置いてある角砂糖とミルクを手にとった。僕が知る限り、彼女がそれをコーヒーに入れるのを見たことがなかった。僕も普段は使わないが、疲れているときなどは、甘いものも欲しいので、一応置いてあるのだ。

「珍しいね。実代はブラック派なのに」

「破瓜というのは、思っていた以上に難儀でな。一晩経つても、痛みがたまにズキッと来る。おかげで、あまり眠れなかった」

「そ、そうなんだ。それは、なんというか、大変だね」

男には決してわからない痛みだと思う。謝るのも彼女の覚悟に対して失礼かと思い、ひどく曖昧な言葉で茶を濁すことしかできなかった。

「異物感というかな。まだ、中に入っているような感覚がある。痛みよりも、むしろこちらが寝不足の原因かもしれん。もしかすると君は立派なものを持っているのかもしれないな」

昨晚のことを棚に上げるならば、実代の言葉はセクハラだった。どう答えていいのかかわからず、僕はソファに座り、コーヒーを啜った。

「私はそれなりの体型を維持していたし、先日身体測定では周囲に羨まれた。そこそこのものと自負していたが、どうだった？」

昨日の恥じらいはどこへやら。実代は好奇心なのか、僕をからかいただけなのか、昨晚の話を続けた。

「比較対象が無いから、わからないけどね。綺麗だと思ったよ。それに、可愛かった」

僕はつとめて冷静を装いながら、思わず脳裏で昨日の実代を思い出してしまった。

荒い息。汗に濡れた、火照った肢体。とろんとした瞳。

目の前に悠然と佇む人間と、同一人物とはとても思えない。今の実代は綺麗という言葉があてはまるが、昨日は確かに、可愛いと思っ

た。
俗な言い方をすれば、今は見惚れるだけだが、昨晚はそそった。

「可愛いと言われたのは、はじめてかもしれないな。なるほど、悪い気分じゃない」

実代は満足そうに頷いて、コーヒーに角砂糖を二つ落とした。テイスプーンでそれをゆっくりと掻き回し、ゆっくりと口をつける。「じゃあ、反対に聞くけどさ。僕はもうだったかな。別に自負するほどのものはないけど」

どう反応していいかわからず、僕は彼女に倣って尋ねてみた。実代は逡巡してから、ふとにつこりと笑った。

「普段の君は、落ち着いていたが、昨晚はとても一生懸命だった。なんというか、可愛いと思うほどにな」

「……可愛いと言われたのは、はじめてだよ。複雑な感情ってやつかな」

呵々（かか）と彼女が笑うのを見て、次はもつと冷静になろうと思った。もつとも、昂ぶる気持ちを抑えては、そもそも行為にならないのだろうけど。

「しかし、昨日を鑑^{かんが}みるに、感情の起伏がないわけではないのだないよいよ読書をはじめようかと思っていると、実代がぽつりと呟いた。

「どういうこと？」

「誠^{せいじ}二は、私の前で声を荒げるところか、大声で笑ったことすら無かったからな。昨晚、必死な顔をして、熱に浮かされたように好きだと連呼してくれた。私も、自分があればほど乱れるとは思っていなかった。感情が薄いから、恋愛を理解できないのかとも考えていたのだが、それはなさそうだな」

「なるほどね」
確かに、僕も実代も滅多に声を荒げることはしない。苛立つこともあれば、悲しんだり、喜んだりもするのだが、それらを表に出すのが得意ではないだけだ。

つまらない男。空気が読めない。そんな自分の風評を聞いたこと

ぐらいはある。やはり人よりは起伏が大人しいのかもしれない。多少なり悲しくはあったが、己の行動を見れば至極当然で、仕方ないと、それきり考えなくなってしまうたのだから。

おそらく、実代も同じだと思う。掴み所のない性格や、大仰な言い回し。すっかり慣れてしまった僕は気にもならないが、何を考えられているかわからないとか、不気味だとか、近寄りがたい人間だと言われているようだ。

勿論、最低限のコミュニケーションは取っている。クラスには友達もいる。実代は性格や言動はともかくとして、美人だから、男連中には受けが良い。実際、曲がりなりにも交際をはじめてから、羨まれることが幾度あった。

「女に興味がないフリして、ちゃっかりしてるな、チクショウ」

興味が無い故に交際に至ったと説明するのも面倒で、言われるがままにしておいた。いずれ、恋愛を知ることができれば、そのときに彼のぼやきが、真実になるかもしれないと、どこかで願っていたのかもしれない。

「この一週間で得たものは、人が言う恋とはかけ離れた、ひたすらに穏やかな心地よさと、好いても、好かれてもない恋人。失ったものは、処女だというのだから、これを小説にしても、面白いかもしれないな」

実代はさぞかし楽しそうに、口元をにやりと緩める。確かに、この二人の関係を小説にしたら、面白いかもしれない。ただ、僕には最も重要であろう、結末が想像できなかった。

それよりも、この期に及んで、話を小説に持っていく実代は、流石はこの珍妙な部室にいるだけのことはあると、得心した。何よりもまず、小説ありき。実に僕たちらしい。

「実代は、どんな結末を考える？」

少し興味が湧いて、この話を続けてみることにした。恋愛の話題よりも、よほど性に合っていると、内心で苦笑する。

「そうだな。単純な好みで言えば、このまま恋を知らずに終わるの

が面白い。自分の知らぬ感情を求め、偽りの関係が続ける。疑問を持たないわけではないが、打破するだけの答えを持ち合わせる事ができず、当初の目標は達成されることはない。しかし、二人の曖昧な関係は続いていく。心情を巧く読ませる文章ならば、是非、拝読したいものだ」

「ひどく私小説的なものになりそうだね」

「突然恋愛に目覚め、笑顔で手を繋ぐ結末よりは、よほど読み応えがあるだろう？」

実代の言葉に、僕は素直に頷いた。あまりに陳腐な大団円も嫌いではないが、小説の面白さを追求するならば、この物語はバッドエンドで締めるべきだ。アメリカの作家で、シニールコメディを得意としていたカート・ヴォネガットは、創作講座でそのようなことを言っていた。きっと、世間一般では大団円が望まれるだろう。ただ、氏の言葉を借りるならば、物語が肺炎に罹^{かか}ってしまう。

「創作意欲があれば、筆を執るのだろうが。いやしかし、もしそうであれば、このような話は考えなかったかもしれない。私小説であれば、なおさらだ」

私小説は、作家自身の経験や感情をダイレクトに表現する。大正の時代に花開いたこのジャンルは、作者を主人公としたノンフィクションと言っても、あながち外れではない。田山花袋^{たやまがたい}の『蒲団』はあまりにも有名だろう。

創作意欲が無い文芸部員だからこそ起こったこの状況は、決して私小説として発表されることはない。実代はそう言いたいのだろう。「今からでも、実代が書いてみたらどうか。そうすれば、感想文は必要なくなる」

「昨晚のことも私小説として書くというのか　文芸部存続どころか、停学がオチさ」

「……ああ、確かに」

昨日、実代も言っていたが、不純異性交遊は校則で禁止されているのだった。これでは私小説が、ただの暴露本に成り下がる。それ

に、僕の感情いくらが起伏に乏しいといっても、自分たちのセックスを文章で披露できるほど羞恥心が欠落しているわけでもない。「誠二が書いてみるのはどうだ。昨日のことは、妄想とでも説明しておけばいい」

「昨日が印象的すぎて、ただの官能小説にしかないよ。どのみち、よくて停学ってところじゃないかな」
僕が答えると、実代は再び呵々と笑った。

結局この日、手に取ってまでいた文庫本は、ついぞ開かれることがなかった。

僕たちは安っぽい音色のジャズをBGMに、コーヒーを飲み、何の益にもならないことを、ずっと話し続けていただけだ。

部室に来て小説を読まなかったのは、初めてのことだった。

ヴォネガットの創作講座

- 1 赤の他人に時間を使わせた上で、その時間はむだではなかったと思わせること。
- 2 男女いずれの読者も応援できるキャラクターを、すくなくともひとりとは登場させること。
- 3 たとえコップ一杯の水でもいいから、どのキャラクターにもなにかをほしがらせること。
- 4 どのセンテンスにもふたつの役目のどちらかをさせること
登場人物を説明するか、アクションを前に進めるか。
- 5 なるべく結末近くから話をはじめること。
- 6 サディストになること。どれほど自作の主人公が善良な好人物であっても、その身の上におそろしい出来事をふりかからせる

自分になにからできているかを読者にさとらせるために。

7 ただひとりの読者を喜ばせるように書くこと。つまり、窓をあけはなつて世界を愛したりすれば、あなたの物語は肺炎に罹つてしまふ。

8 なるべく早く、なるべく多くの情報を読者に与えること。サスペンスなどくそくらえ。なにが起きているか、なぜ、どこで起きているかについて、読者が完全な理解を持つ必要がある。たとえばゴキブリに最後のなんページかをかじられてしまつても、自分でその物語をしめくくれるように。

第五話　ときには喧嘩もしてみよう

一体、恋愛とは何ぞや。思い浮かぶのは得てして曖昧で抽象的な言葉でしかない。

実感の伴わない言葉に、果たして意味などあるのだろうか。そして、その意義がわからないままに続ける、実代との関係とは、何なのだろうか。

などと考えてみたものの、実代の唇は柔らかくて、あたたかい。一体どういう仕組みなのかはわからないが、キスというのは随分と心地がいいものだ。

ああだ、こうだと思えるよりも、唇を重ね合わせたほうが、よほど建設的なんじゃないだろうか、思考の放棄に至るぐらい、僕と実代は部屋で長いキスを交わしていた。

「ん……はふう」

普段なら決して聞くことのできない間の抜けた実代の声は、それだけで蠱惑的だ。こわくてき 気付けば、僕の右手が自覚もないままに、実代の胸元をまさぐっていた。

「……だ、駄目だ」

実代は微かに僕を押して抵抗するが、それが一層、僕の嗜虐心に火をつける。文学少年らしく、理数系の科目は苦手だが、抵抗が1アンペアを下回ると、力が上がっていくことぐらいは知っている。微弱過ぎる抵抗は、欲望を肥大させるのだ。

「そ、それは、アンペアの基準を1に据えているからだ。基準が0だと都合が悪かっただけで、決してこの状況の説明として正しくない……ふあっ!？」

「燃えさかる火に、ちよつとの水を垂らしたところで、火の勢いは増すばかり……っていうほうがよかったかな？」

律儀に訂正する実代に、さらに指を這わせる。妙に気障な会話が僕たちなりの照れ隠しであることはお互い承知だろうが、つまると

ころ、照れてはいるが、嫌がってはいないわけで。

「……優しく、してくれ」

実代はそう呟いて、僕の胸に顔をうずめるのだった。

さて、そんなふうに分と順調に進んでいる交際が二週間を過ぎた辺りで、実代が一つの提案をしてきた。時間は放課後。場所はいつもの通り、文芸部室。

「私たちはこれまで、恋人らしいことをしてきたわけだが、まだやっていないことがあった」

この言葉に僕は少し驚いた。もう、全部やり尽くしたと思っていたからだ。

デートにキスにセックス。手も繋いだし、のんびり喋ったりもした。僕の知りうる限りの恋人らしい行為は、これで全部だ。一体、他に何があるというのだろうか。

「わからないのも無理はない。およそ、私たちには無縁だったからな」

最早トレードマークのような不敵な笑みで僕を見据える実代だが、実は最近、その不敵な笑みから感情を読み取れるようになってきた。別に細やかな仕草で判別しているわけではなく、雰囲気だけなのだが、これが割と当たる。遂に恋人らしさもここまで来たかと嬉しくなるが、肝心の感情だけが求めるところに追いついていない。

ちなみに、今の実代はあまり喜んでいる様子ではない。むしろ、少し迷っているという感じだ。はて、恋人らしいことを見つけた割には妙である。

「折角だから、挑戦してみたいけど、難しいの？」

「う、うむ。おそらく、私たちにとっては、かなりの難関だ。そのせ、せつくすよりも」

実代は普段の態度とは裏腹に、割と純情というか、いわゆる下ネタ系に弱い。セックスという単語を口にするだけで内心では恥じらっているようなのだ。

しかし、そのセックスよりも難関となると、これは相当である。僕たちのような似非と呼ばれても仕方ない関係に、果たしてチャレンジすることが許されるのかも疑問だ。

「……とりあえず、聞くだけ聞こうかな」

「ああ。まあ、聞けば理解できるだろう。まだしていないのは、喧嘩だ。つまりところ、痴話喧嘩というやつだな」

実代の言葉に、僕はがくつと姿勢を崩した。一体どんな難しいことが待ち受けているのかと思ったら、たかだか喧嘩だったか。

「……いや。喧嘩、か」

あまりにも有り触れた言葉に思わず脱力してしまったが、よくよく考えてみれば、確かに難しいかもしれない。

僕と実代は仲が良い。気が合うし、趣味も合うし、お互いの話をよく聞こうとする。意見が衝突することもあるが、そうになると、二人とも冷静に意見を交換して、話を前に進めようとするタイプである。喧嘩どころか、そういう意見の食い違いが楽しくて、積極的に相手と違う意見を見つけようとまでしてしまうほどだ。

お互いがそれを楽しんでいる節があるので、本来ならば喧嘩に発展するようなことも、笑顔でやってしまうわけだから、そういう意味では、セックスよりも難しい。

「でも、わざわざすることじゃないよね？」

どうせなら、喧嘩などしないに越したことはないように思う。確かに痴話喧嘩という言葉があるぐらいなのだから、喧嘩というのは恋人らしい行為なのかもしれないが、多くの恋人達はそれを回避しようとするのではなからうか。

「私とて、誠二と喧嘩などしたくないし、そもそもどうすれば喧嘩になるのかも見当がつかない。罵倒したところで、誠二はそれを受け止めてしまうだろうしな」

実代は苦笑して、コーヒーに口をつける。なるほど、そこまでわかっていてなお、提言するというからには、何かしらの展望が望めるということか。

「雨降って、地固まるとでも言えば、わかりやすいか。喧嘩をして、お互いの生の感情をぶつけ合った後は、より強固な絆で結ばれる。今までは行為というもので恋人らしくあろうとしたが、今度は感情だから、今までよりも一層、近づけるように思う」

言われてみれば、確かにその通りである。だが、しかし。

「僕たちは、一体何について喧嘩すればいいんだろうね？」

「さっきからそれを考えているが、何を話したところで喧嘩になりそうにない。いやはや、年中喧嘩をする恋人もいると聞くが、今だけは羨ましい」

結局、その日はどうにか喧嘩に発展しないものだろうかとお互いに相手の駄目なところを指摘する流れになったが、お互いが「確かに」とか「気をつけるよ」と、すぐに首肯してしまうので、ちつとも喧嘩にならなかった。それどころか、今まで微かに気になっていた点が改善されてしまい、ますます喧嘩から遠ざかってしまったほどだ。

「どうやら、倦怠期というのを待つしかないか」

「来ればいいんだけどね」

望んでいては、絶対にやってこないだろうと思いつながらも、そう呟かずにはいらなかった。

しかし、案外チャンスというものは早くやってくるものだ。セックスをする機会を窺ったら、当日中に叶ってしまった僕たちである。数日を間に挟んだだけ、喧嘩のほうがやはり難関だったのだろう。

「誠二。まさか君が浮気をするとは思わなかった。見損なったぞ」

「だから、あれは姉さんで、受験でピリピリしてたから、散歩に連れ出ただけだってば」

「そのような言い訳、聞きたくはない。姉と仲が良いからと言って、腕を組むはずがないだろう。確かに私たちは恋人として間違っているかもしれないが、きちんと恋愛ができるのならば、そう言えない。私の身体が目当てだったか？」

「だから違うつて。姉さんが貧血起こして、寄り添って歩いただけだつて。大体、身体目当てって言っけど、そもそも誘ったのは実代じゃないか」

絶対に喧嘩はしないと思っていたのだが、いざ始まってしまうと止まらない。僕がどれだけ誤解だと言っても、実代はそれに耳を貸さず、終いには「もう別れる」とまで言い出す始末である。

「今、別れたら文芸部はどうするのさ」

「知らん。浮気性の女好きと一緒にいると思うと虫酸が走る。廃部でいいだろう」

「……へえ。浮気も女好きもどうでもいいけどさ。最後のはちょっと、許せないね」

なるべく冷静に誤解を解こうと思っていたが、あることが、実代が言つてはならないことを言ってしまった。

文芸部が廃部になるだと。僕がようやく見つけた、最高の読書の環境を、実代は要らないというのか。

「ものの弾みだとしてもね、廃部でいいなんて言つては駄目だ。ここがどれだけ、僕にとって大切な場所か、実代はわかっていないみたいだね。ずっと探していたんだよ。落ち着いて、心ゆくまで読書ができる場所を。それに、僕たちはここを守るために交際を始めた。実代は、そのために処女まで捨てたじゃないか。実代にとつてもそれだけ大切な場所だったはずだ。そこまでしているのに、要らないなんて言うのは駄目だ。この場所もだけど、自分ももっと大切にしないといけない」

長い台詞を一息で喋り、実代の様子を窺う。何か言葉を探すように、視線を中空に漂わせているが、まだ折れる様子はない。ならば、わからせてやる。僕がいかに、この場所を大切にしている、それと同じくらいに実代も大切に思っているのかを。

「……というわけで、文芸部は絶対に廃部にしない。実代と一緒にいるのは楽しいし、実代も楽しんでいると思うから、実代と別れる

のも嫌だ。確かに恋愛とは少し違いかもしれないけど、僕たちにはお似合いだと思っし、先には本当の恋愛が待っているかもしれない。そもそも、事の発端の誤解は今度、家に来ればわかるさ。姉さんを紹介する」

ああだこうだと、僕が喋ること十数分。すっかり胸の内を吐き出して、思わず大きく一息ついた。さて、実代はどうしただろうと彼女の様子を窺うと、何故か優しく笑っていた。

おかしい。何故喧嘩をしている最中なのに、彼女は笑っているのだろうか。

不敵な笑みなら理解できる。あの余裕のある表情で見られると、少し萎縮してしまう。喧嘩のときの表情としては効果的だ。しかし、まるで僕を見守るような笑顔というのは、これいかに。

「……実代？」

「まさか、そこまで私のことを考えてくれたとは驚きだよ。いやはや、我ながら中々の役者だと思ったが、誠二のまさしく心からの言葉に、思わず素に戻ってしまった。シナリオ通りならば、ここから私の屁理屈が並ぶはずなのだが……返す言葉がないとはこのことだ」

実代の言葉が理解できずに、首をかしげる。

役者。素に戻る。シナリオ。

まるで、実代が何かを演じていたかのような言葉だ。もし、そうだとするならば、この喧嘩らしきものは

「どうだろうか。誠二が掛け値無しに怒るなら、文芸部のことだと思ってな。ただ、いきなり廃部にしようと言っては、怪しまれて終いだらう。そこで、昨日偶然見かけた様子を利用して、別の話題から入ってみた。 magari なりにも、痴話喧嘩を体験できたと思うのだが」

やられた。

そうだ。よくよく考えてみれば、実代が意固地に浮気だと言い張る時点でおかしかった。僕が説明して、納得がいかなければ、納得

のいく証拠を求めるだろう。それもなく、僕の意見を封殺しにかかる時点で、実代の思惑に気付くべきだった。

「……ひどいよ。僕が独り相撲をやっただけ、か」

「いやいや。あながちそうでもなかったぞ。誠二が文芸部を大切に思っているのは知っていたが、まさか、私もあそこまで大切に思ってくれているとは、本当に驚いた。これが、相手の生の感情というやつなのだな」

嬉しそうに言われては、こちらも返す言葉がない。

ただ、本気で廃部になればいいと考えていたわけではなかったよ
うで、一安心だ。それに、これも実代なりに考えての行動だったの
だろう。事前に僕を騙す相談を持ちかけられては、僕が騙されるは
ずがない。

「……まあ、それでも騙したことには違いない。今後のしこりにし
ないためにも、誠二も何らかの報復で返してくれ。一応、拳骨ぐら
いの覚悟は決めてきた」

実代はふと表情を引き締めて、真っ直ぐと僕を見た。

彼女は、本当に解っているのだろうか。そういう態度が、いつそ
う報復なんてものを遠慮させることに。

ただ、一度決めた覚悟を無碍にしないのは、やはり僕の美德の一
つである。報復とまではいかないが、せいぜい、悪戯ぐらいなら許
されると思う。それに、僕だけ生の感情でぶつかったのも恥ずかし
い。

「じゃあ、目を瞑ってくれないかな？」

「む。ゲンコかと思ったが……視覚を奪うとは恐怖心を煽るのが上
手いな」

実代はちつとも怖そうな素振りを見せずに、目を瞑った。僕はそ
れを確認すると、なるべく音を立てないようにゆっくりと実代に近
づく。

「まさか、キスというオチか。中々に粋だが、それでは手打ちにな
らないぞ？」

実代が僕の気配を察してか、先手を打つ。しかし、残念ながら外れである。キスは別にこの機会でなくてもできる。

僕は黙って、さらに彼女との距離を詰める。お互いが手の届く程度の場所まで近づき、そこで勢いよく、実代のスカートをめくりあげた。

「きゃあっ!？」

ふわりと舞うスカート。真っ白な太腿と、微かに見えた薄桃色の下着。そして何よりも、真っ赤になってスカートを抑え込む実代の様子。

「うん。生の感情っていうか、生の表情だけど、悪くないね」

僕が実代を真似て不敵な笑みを浮かべると、彼女は頬を赤く染めながらも、ぺしぺしと僕の胸板を叩いてきた。その様子がなんだかかわいくて、ぽふぽふと頭を撫でる。

なるほど。これだけのことで、昨日よりもなんだか幸せな気分になってくる。

たまには、喧嘩を試みるのも悪くはないかなと、僕は思った。

第五話 ときには喧嘩もしてみよう（後書き）

ちよつと趣向を変えて、ラヴコメ風味の話にしてみました。
本領発揮と気張ってみたのですが、実代にグツときてくれたなら嬉しいです。

第六話 告白をしよう

放課後になると、文芸部室へ向かうことが当然のようになって久しい。

先週は掃除当番だったこともあり、実代がいつも先に部室に来ていたのだが、今週は逆に実代が掃除当番で、僕が先に来るようになった。

一人の時間を持て余すことなど、僕たちにはない。そもそも、本を読むためにこの場所に来たのだから、当然だ。

本来ならば、コーヒーを淹れて、ゆっくりと本の世界へと旅立つところなのだが、先日、実代にスカートめくりなる悪戯を仕掛けたところ、思った以上に可愛かったので、また悪戯がしたくなってしまうのだ。

鞆を本棚の影に仕舞い込み、自分は備え付けの掃除用具入れに身を潜める。実代が部室にやってきて、落ち着いて本を読んでいるところを、後ろから驚かすという、幼稚かつ極めて楽しそうな悪戯である。

目線の高さに丁度、部室を確認できる通気口があるので、そこから様子を窺うこと十分。実代ががらりと扉を開けて、部室に入ってきた。

「……まだ来ていないか」

部室をぐるりと見渡して、実代はやれやれと鞆から文庫本を取り出した。しかし、すぐにそれを開くことはなく、ラジカセのスイッチを入れて、コーヒーのドリッパーの前に立った。

「ふむ。思いきり苦くするか。誠二のしかめっ面も面白そうだ」

聞き捨てならない独り言を呟きながら、実代はコーヒーを用意しはじめる。ちよっと予定とは違うが、このタイミングで驚かせてやるかと思った。そのときだった。

「失礼するぞ」

部室のドアをノックする音と共に、低い男の声が聞こえた。実代が振り返ると、がらがらとドアが開く音がして、男子が、部室に入ってきた。

あまり良好とは言えない視界だが、友人、知人ではない男だということとはわかった。ただ、見知らぬ男子でもない。顔ぐらいは見たことがあった。

「確か、生徒会長ドノ、だったかな？」

実代が問いかける。そう、彼をどこで見ていたかというところ、全校集会などの場の、壇上や、部長会議や部費交渉での場面においてだった。

イケメンという言葉はあまり似合わないが、容姿は男の僕から見ても整っていると思う。それで何故、イケメンが相応しくないかというところ、顔立ちがとても上品だからだろう。少し神経質そうではあるが、嫌味がなく、すっきりとした印象を受ける。銀縁眼鏡が地味な印象ではなく、理知的なイメージを産むほどだ。だから、俗な言葉よりも容姿端麗とか、端正な顔立ちという言葉が似合う男だった。

「ああ。生徒会長を務めている、不破^{ふわ}という」

生徒会長　不破はぐるりと部室を見渡して、ふむふむと頷いた。

「中々趣味が良い部室だ」

「ふむ。入部希望か？」

不破の言葉に、実代がはぐらかすような質問で返した。

「それも悪くはないが、それでも忙しい身だね。落ち着いて読書というわけにはいかない」

「損な人生だ」

実代は不破の言を予期していたのだろう。苦笑してコーヒーを力ツプに二つ注いだ。

「その忙しい会長ドノが、何用かな？」

不破に席を勧め、実代もソファに身を沈めた。不破はゆっくりと腰を降ろすと、コーヒーを一口啜った。少し顔が歪む。

「まあ、査察というところだ。部活動は生徒会が面倒を見ている、

という形になっているのでね。二三、質問して良いだろうか？」

「生憎、部長はまだ来ていない。筋から言えば、その手の話は部長に持っていく物だろう？」

二人の問答は、およそ高校生らしい雰囲気がるでない。淡々としており、落ち着きがある上に貫禄まで備わっているのだから、芝居的一幕のようですらある。

「部員数が二人の文芸部だ。誰が答えても大差あるまい。それに、雪吹^{ふぶき}さんは副部長だったと思うが。部長の代理という形で頼めないか？」

「まあ、そちらがそれでいいのなら、答えよう。しかし、わざわざ私の名前まで調べたのか？」

実代がやれやれと肩を竦めて、不破を見る。確かに、わざわざ各部活動の部長、副部長の名前を覚えるのは、それなりに苦労するだろう。

「そこまで熱心な生徒会長でもないさ。君のことは、前々から知っていた。それより、質問だ。かねてから、まともに活動している記録がないのだが、これはどういうことだろうか？」

「ふむ。まあ、この性格だ。生徒会には要注意人物とでも映ったか。活動に関しては、部員数が少なく、先代からの引き継ぎも一切無い状態だった。旺盛な活動ができるはずもない。しかし、最近ようやく取り組むモノができた。結果をお見せできるよう努力している」

「生徒会ではなく、僕個人の興味として君に関心がある。なるほど、吉野先生が申請したという感想文だな。ならば、それに関してはこれ以上問うまい。部活動に関してだが、何か申請はあるだろうか。予算に関しての陳情は別途の機会にしてほしいが、改善して欲しい点などあれば、聞くが」

「わざわざ関心を持たれるほどの人間ではないが。部活動に関しては、特に問題はない。不満なく、専念できている。ただ、一つ願うことがあるのであれば、今回の吉野先生が申請した感想文だが、いきなり結果が出るほど、甘くもあるまい。結果よりも、活発に活動

している点を重視してほしいところだ」

まるで政府首脳の会談のような、腹の探り合いという会話であるが、それと同時に並行に口説き文句のような歯の浮いた台詞を並べる不破には恐れ入る。それに平然と応対する実代も実代であるが、

「実に魅力的な女性だと思うけど。結果が大事には違いないが、過程は過程で重要だと僕も思う。参考にさせていただく」

「理解してくれる男性は、私も嫌いではないな。しかし、会長ドノよりも、気の合う恋人がいる身だ。さて、質問はこんなところだろうか？」

実代の言葉に、僕は少し嬉しくなった。あまりにも自然に、彼女は僕を選んだのだから。

しかし、その反面。現状の自分を省みて、心底情けなくも思った。何故、僕はロッカーの中で出刃亀のように覗き見をしているのだろうか。

「ふむ。ここにきて、話が一つにまとまったか。最後に一つ。恋人とは鷹成誠二……文芸部の部長で間違いないか？」

自分の名前が不破の口から飛び出してきて、僕は少し焦った。

「それが最後の質問か。答える義理はないな」

「……確認しただけさ。要は、この部室が健全な目的で使用されているかを聞きたかっただけだ。二人きりの部活動で、ここは密室だ。男女交際を否定するつもりはないし、部内での恋愛も個人的には構わないが、風紀の問題もある」

「愚問、というやつだろう。聞かれて困ることなどしていない。健全で清らかな交際をしているよ」

実代の堂々とした大嘘に、我が恋人ながら恐れ入る。つい先日、ちょうど不破が座っているソファでセックスをしたばかりである。

「ならば、問題はない。そうそう、雪吹さん。質問は終わりだけど、最後に一つ、頼みたいことがあるんだ」

不破はにこりと笑って、実代をまっすぐと見据える。実代は表情を変えることなく、じっと不破を見ていた。

「僕と、交際していただけないだろうか？」

第七話 恋を知ろう

せつなる恋の心は尊きこと神のごとし

樋口一葉

不破^{ふわ}。確か名前は俊彦^{としひこ}だったろうか。

我が校の生徒会長であり、同学年。同じクラスになったことがないし、面識もないので彼を詳しくは知らないが、いかにも生徒会長らしい生徒会長、というのが僕の感想だった。

銀縁眼鏡が似合う、端正な顔立ちは、女生徒からも人気が高いだろう。やや神経質そうでもあるが、物腰は至って穏やかで、礼儀正しい。本人が壇上で語っていたことだが、中学生の頃から生徒会長をやっていたらしい。一年生の頃に、先輩を相手取って選挙に勝ち、今年度も間違いなく彼が会長を務めると言われている。

「先ほどのやりとりの後だが、敢えて聞こう。私には既に恋人がいるのを知っての告白か？」

僕が突然の出来事に呆然としているうちに、実代はいつもと変わらぬ様子だった。それは不破も同じで、愛の告白らしからぬ、抑揚のない声で後に続ける。

「勿論さ。浮気相手になるつもりもない。鷹成君と別れて、僕と交際してほしい」

再び自分の名前が挙がって、ようやく事態を把握する。

実代と僕が別れる。そして、実代と不破が交際する。

「残念だが、お断りしよう。誠二と別れるつもりはない」

僕がどうこう思う前に、実代は答えを出していた。僕は少し安心した。この環境は気に入っているのだ。未だに好きだとか、惚れた腫れたを理解できない僕たちだが、お互いを気に入っていて、今が

心地よいと感じているのは事実の筈だ。実代の本音を知ることではできないが、きつと同じように感じてくれているのだろう。

「あっさりとフられてしまったか。なるほど、かなりシヨックだよ」
不破は言葉とは裏腹に微笑みながら、コーヒーを啜った。やはり、相当苦かったのだろう。顔をもう一度しかめて、大きく溜息をついた。

不破はそれからしばらくして、不意に立ち上がると「失礼するよ」と、割と爽やかな表情で部室を後にした。

「……やれやれ」

実代は断りの言葉を口にして以来、久しぶりに呟いたかと思うと、ぽふ、とソファに身体を大きく倒した。

まいったことに、完全に出ていくタイミングではなくなってしまった現状に、どうしたものかと思ひ悩む。今、いきなりロッカーから僕が出て行ったらどうなるだろうか。普段なら実代は呆れた顔の一つで済ませるだろうが、正直なところ、この状況の実代は想像ができない。

僕がどうしたものかと狭いロッカーで首を捻っていると、実代が不意に立ち上がり、そのままスタスタと部室から出て行ってしまった。そして、がちやりという施錠の音が聞こえる。

「……はあ」

僕が来ないので、先に帰ったのだろう。とりあえずしばらく待つてから僕はロッカーから抜け出した。

「……何やってんだろ」

無性に情けなくて、気を紛らわせるように一人ごちる。しかし、我ながら妙なタイミングで悪戯を試みたものだ。心から、スカートめくりをしなくてよかったと思う。もしも、今日にスカートをめくっていて、あの実代に見つかっていたら、即刻廃部だっただろう。それにしても、その不破という生徒会長。一体どういふつもりなのだろうか。およそ告白らしからぬ雰囲気での、真っ向からの告白。

「失礼する」

「うわあっ!？」

不意に先ほどと同じ声が聞こえ、がらりと扉が開いた。びっくりして振り返ると、何故か、去ったはずの不破が、真っ直ぐと僕を見据えていた。

「え、えと……どうして？」

査察が目的なのか、それとも告白が目的なのか。そんなことは知らないが、用事は終わったはずだった。なのに、何故またここに来るのだろうか。

「なに、僕の位置から、ちょうどロッカーの通気口から覗く人影が見えていたものでね。文芸部で、雪吹さんがあの場において、そんなことをするのは、鷹成君だけだろうと踏んだまでさ」

不破は爽やかとも、冷徹とも取れる笑みを浮かべて、肩を竦めた。そういうポーズがひどく似合うのは、彼の長所なのか短所なのか。

「まあ、雪吹さんとの会話を聞いていただろう。僕の気持ちは知って貰えたと思う。その上で、少し話があるんだ」

盗み見ていたことを怒っているような節はない。むしろ、不破の口ぶりからすると、敢えて僕に告白のシーンを見せたかのようにすらある。どういう、ことだろうか。

「……コーヒーを淹れるよ。今度は、そこまで苦くないものをね」
僕がそれだけ言つと、不破は満足そうににこりと笑った。

「恋愛においては、恋したふりをする人のほうが本当に恋している人よりもずっとうまく成功する。これはフランスの高級娼婦として有名な、ニノン・ド・ランクロという女性の言なのだけだね」

向かい合ってソファに座った途端、不破はまるで先手を取るかのように、ぼそりと呟いた。そして、それは実に効果的だったと言える。

恋したふり。その言葉が、ぐさりと僕の胸に突き刺さった。これだけ遠回しな単刀直入もはじめてである。不破は、一体どういう経

緯なのか、僕と実代の関係がどのようなものであるのか、気付いて
いるらしい。

「吉野先生から聞いたよ。恋愛小説の感想文を投稿するそうじゃな
いか。そして、それを堺に、君と雪吹さんは交際を開始した。前々
から雪吹さんに関心を持っていたのだが、およそ彼女は、恋愛に興
味を持つ人間には思えなかった。だからこそ、僕も行動に移せな
かったのだが……そうになると、実に不思議だ。僕の見立てが間違っ
ていたのならば、問題はない。声をかける勇気が持てなかった僕が、
悪い。しかし、こう考えるとどうだろう。もしかして、雪吹さんは、
件の感想文を書くために、恋愛を経験しようとしているならば、と」
不破の推理が当たっていることは、先ほどの言葉からもよくわか
っていた。しかし、改めて道筋立てて聞いてみると、鮮やかすぎる。
自分たちの学校の生徒会長が頭の良い人間で、勘も鋭いことは有り
難い話であるが、この状況では喜べない。

「僕は、これほど自分が生徒会長であることを感謝したことはな
かった。生徒会長でなければ、吉野先生から感想文の話を聞くこと
もなかっただろうからね」

黙り込む僕を尻目に、不破は朗々と語る。湯気の立ったコーヒ
ーは、お互い口をつけることなく放置されていた。

「……僕たちを、笑うのかな？」

僕は、ようやく一言だけを呟くことができた。

これは直感であって、他の何物でもないけれど。多分、不破は本
当に実代のことが好きなのだと思う。

恋を知る男は、一体どんな風僕たちを見るのだろうか。自分の
好きな人を、その人のことを好きではない男が奪ったのだ。悔しい
のかもしれない。悲しいのかもしれない。僕は、そんなことすらわ
からない。

ただ、このあまりにも巫山戯た、ままごつのような恋愛を見て、
滑稽だと思わない人間がいるだろうか。当人である僕ですら思うの
だ。この関係が、いかに滑稽で、馬鹿馬鹿しいのかと。

「笑えるほど、達観しちゃいないさ。正直なところ、実に悔しい。

君が彼女を好きならば、或いは許せたのかもしれないけどね。どうやら、君も雪吹さんと同じのようだ。恋愛を、知らないのだろうか？」

「……ああ、そうだよ」

仮に、僕がここで否定したら、不破は僕を許しただろうか。妙に素直なのは、僕の美德であると同時に、やはり悪癖だ。

不破は僕の様子をじっと窺っていた。まるで、僕の仕草から、本質を捉えようとするかのように。実代と似ているが、少し違う。彼女に見つめられているときは、心地よかったが、今は妙に落ち着かない。

「別れてくれ」

そして、その言葉は唐突に飛び出した。

「君たちの関係は、君たちが決めたことだ。本来ならば、僕が口出して良いものではないと思う。けれど、僕には許せない。雪吹さんが、好きでもない男と並んで歩くこと。その男が、雪吹さんを好いていないこと。君には、わからないだろう。この辛さは」

冷静だったはずの不破の言葉に、微かに感情の色が見え始めた。表情はあくまでも変えずに、ただ、淡々と言葉を並べているだけのはずなのに。不破の言葉に熱が混じっていることがわかった。

ああ、成る程。これが、恋なのだろう。誰かを想うことで、自分が口出ししてはいけないことにまで、口を出してしまうこと。あくまでも、恋という感情の一端でしかないのだろうか、少なくとも、この不破の行動は恋によるものなのだ。

「できるなら、奪いたい。僕が、雪吹さんの隣に立つ男でありたいと思う。けれど、雪吹さんはそれを望んでいない。彼女を本気で好きな僕より、ままごとの相手である、君を選んだ。けれど、それで諦められるならば、君たちを許していただろう」

怒り。嫉妬。悔しさ。

きつと、それは負の感情なんかじゃない。思わずそんなふうに考えてしまうほど、不破の言葉は真っ直ぐだった。

雪吹実代という女性を、不破俊彦という男は、真剣に想っている。だから、真剣でない僕たちを許すことができない。どうして自分では届かないのかという嫉妬すら、真っ直ぐな想いを象徴しているかのような、強さがあつた。

未だ崩さぬ表情の裏に、不破は一体、幾ばくの想いを抱えているのだろうか。恋を知らない僕には、それを理解する術を持たない。「……別れてくれないか。僕の勝手な気持ちには違いないが、僕は君たちを認めない。僕が君以上の人間だなんて言わない。彼女を今以上に幸せにできる保証など何もない。けど、僕は彼女の不幸にしても、この状況を許すことができない」

それだけ言つて、不破は大きく息を吐いて、コーヒーに口をつけた。まるで、それが言いたいことを全部言つた証であるかのように、僕は思った。

僕は、一体どうするべきなのだろうか。

恋を知らない僕ですら、わかつてしまうほどに、不破は真剣に実代を想っている。

僕と実代の関係を見抜くほどに、頭の良い人間が、あまりにも愚直に僕に別れを求める。それは、きっと恋をしているからだ。彼ならば、もっと計画的に僕たちを別れさせることもできただろう。それだけの行動力がある人間だと思う。

しかし、不破はそうしなかった。あくまでも、真っ直ぐに実代に想いを伝えた。あまりにも下手くそな伝え方だったが、それも、想いの強さ故なのだ。冷静な表情を変えなかったのは、強さ故の弱さだ。

普通の彼ならば、情に訴えかけることもできただろう。もっと、ムードを作ることでもできただろう。しかし、好きな人を前にして、それができなくなった。

ただ、表情を変えずに。ムードとは無縁の、淡々とした調子でしか愛を語れなかった。幾万の齒の浮く台詞よりも、真っ直ぐで、強

い思いだったのだ。

気付きたくなかった。否、正確に言えば、こんな形で気付きたくはなかった。

恋愛の強さと弱さ。不破の思いが、僕にそれを教えてしまった。そして、同時に理解させてしまったのだ。

僕がどう足掻いたところで、不破ほどに実代を想うことなどできない。いくらキスを交わし、身体を重ね、手を繋いだところで、知ることなど出来ないものだったのだ。

これが、恋愛だ。僕たちが求めて、愚行を繰り返した先には決してなかった、恋愛感情というものだ。

「ひとつ、教えてもらって良いかな？」

僕の言葉に、はじめて不破の表情が変わった。少し、驚いていたようにも見えたが、僕にはその表情がどのような感情の表れなのかわからなかった。

「何故、実代を好きになったんだ？」

我ながら、馬鹿げた質問だと思う。ただ、知りたかった。

何故、不破はそれほどまでに実代を想えるのか。その理由は何なのだろうか。

もし、僕がそれを知ることができれば、或いは、僕も実代を

「ジェローム・K・ジェロームというイギリスの作家を知っているかい。彼はこう言った。恋ははしかと同じで、誰でも一度はかかる、とね。はしかに罹る理由を、僕は知らない」

思考を遮る不破の言葉に、僕は頂垂れた。

ジェローム。『ボートの三人男』という旅行小説の筆者だ。カート・ヴオネガット同様、ユーモアのセンスに富んだ作家で、僕も幾度となく彼の著書を読んでいる。好きな作家の一人だった。

「肺炎よりも、はしか、か」

僕の呟きは、おそらく不破にはわかるまい。だが、それでいい。

僕は一度顔を上げてから、もう一度下を向いた。

頂垂れではなく、首肯という形で。

第八話 別れ話をしよう

吹雪実代という女性と交際して、三週間。

その期間が長かったのか、短かったのかはわからない。ただ、そのひとときが僕にとって有意義だったことに変わりはない。

できることならば、もっと彼女とままごとを続けていたかった。だけど。

「誠二……もう、喧嘩は経験した。意趣返しならば、受けて立つが？」

僕の「別れよう」という言葉に、実代はいつものように不敵な笑みで返した。

相変わらずの文芸部室。昨日のようにロッカーに隠れたりせずに、ちゃんとソファに座って実代を待った。きちんと、別れるために。

実代は少し考えた様子の後に、ふと顔を上げた。

「……確かに、別れ話というのは未だに体験していなかった。ある意味、これも恋人らしいことなのかもしれないな」

なるほど、僕の言葉を「恋愛らしいこと」の一環と捉えたらしい。

実代は幾度も頷いて、「それは考えつかなかった」と呟いた。

「流石に喧嘩で出尽くしたと思っていたが、まだあったのだな。しかし、いいのか。これをする、その、終わってしまうのだが？」

実代はやや腑に落ちない様子で、僕を見ていた。当然だろう。僕たちはまだ、恋がどんな感情であるのかなど、全然理解できてなどいないのだ。今、終わってしまえば、感想文を書くことはできない。「終わらせようって、言ってるんだ」

それでも、その言葉が口からすんなりと出たのは、昨晚から自らを洗脳するかのように、何度も練習したからだろう。

「……なるほど、恋愛を知るための一環ではなく、誠二がそう決めたということか」

実代はやはり、とても頭が良い。僕の少ない言葉で、すぐに理解

してくれた。そして、彼女のことだ。理由も聞かずに、頷いてくれるのだろう。

僕たちはずっとそうだった。お互いのプライベートに深く関わることはせずに、ただずっと、本という世界だけで繋がっていた。だからこそ、穏やかな時間を共有することもできたのだし、その関係を快く思っている。

ただ、それだけの繋がりで、恋人と名乗るのは烏滸おしがましいことだった。恋がどんなものかなんてわからないけど、恋をしている人間の気持ちに触れてしまった。あの真っ直ぐな想いの前で、僕は実代と手を繋ぐ勇気が持てなかった。

「他に、好きな人でもできたのか。それならば、是非その気持ちを感想文に活かしてもらいたいが」

実代が再びにやりと笑んで、僕を見た。少しだけ、呆氣にとられる。

そんなことを聞かれるなどと、夢にも思っていなかった。

「違うよ。別に、そういうわけじゃない。僕は、相変わらずさ」

辛うじてそう呟いて、微かに覚えた違和感をじっくりと見つめ直した。

何かが、少しだけ違う。そう、非常に小さな違和感だけど、それをはっきりと感ずることが出来る。

「……つまり、それは文芸部を廃部にするということか？」

実代は少しだけ眉をひそめて、僕を真っ直ぐと見据えた。微かに怒気を孕んだ瞳に、僕は少しだけ安心した。

「そのつもりはないよ。存続はさせるさ」

僕の言葉に実代は満足そうに頷いた。確かに不破の気持ちに対し、僕たちの関係があまりにも許せないものだが、それと同じくらい、僕たちも文芸部が無くなることは許せない。

僕だって色々と考えた。不破が生徒会長なのだから、いっそ交換条件で文芸部を存続させてもらうよう頼んでみようかとも思った。だけど、それは実代を生け贄に捧げるようなものだ。不破もいい顔

をしないだろう。

ならば、どうするか。恋愛感情とは違うが、実代との交際で得たものはあった。心地よい時間と、ただ、幸せだとしか表現できない安寧。課題の主題からは外れるが、自らの感情と、作品の主人公の感情の比較などを書くのが良いだろう。これならば、単なる「感動した」という旨を記した、茶を濁すような類の感想文にはならないし、オリジナリティだけならば抜群だ。

「……嫌だと、言えばどうする？」

僕が少し考えている間に、実代は元の笑みに戻り、ゆっくりと問いかけた。

まただ。また、違和感を覚えた。さつきよりも、強く。

今度はどこがおかしいのか、はつきりとわかった気がする。今までは、絶対になかったことが、起きているのだ。

何故、実代はこんなに食いついてくるのだろうか。

僕たちは決して同じ人間ではない。そりやそうだろう。鷹成誠二と、雪吹実代。名前からして違う。生まれた年は一緒だけど、血液型も誕生日も違う。ましてや、性別すら違うのだ。同じであるはずがない。

しかし、それでも僕と実代は同じだった。つまり、性格や考え方、趣味などが。

お互いの考えていることが大体わかったし、予想外の行動に相手が出たとしても、結局は「実代らしいね」「誠二ならば、それもあるか」という感想に至る範疇だった。実代が交際を提案してきたときでさえ、僕はさして焦りはしなかった。

知り合って一年間。最初の半年はお互いをほとんど知らなかったとはいえ、沈黙の中でさえ、お互いに同類だと感じていたほどののだ。少なくとも、違和感という言葉は、僕と実代のストーリーには存在しなかった。

それが、ここにきて不意に頭をもたげた。一体、何故だろうか。

何故、実代は黙って頷かないのだろうか。今までの彼女ならば、そうしてくれたはずだ。立場が逆ならば、僕だってそうした。それでこそ、僕たちらしい関係だったはずなのに。

何故、実代は、僕の言葉に頷かないのだろうか。

「私は、誠二と交際していて楽しい。恋愛感情を知るためだということ、忘れるほどにな。無論、文芸部を存続させたいとは思いつ、そのためのことだというのも重々承知しているが、何でもない日が楽しみだと思える幸せを、私は知らなかった。終わらせるには、あまりにも惜しい」

僕が深く考え込んでいると、実代はふっと頬を緩めて、穏やかに語り始めた。

「私といることが苦痛ならば、引き留めはしない。正直なところ、その線は無いというのが見解だが」

「うん。苦痛どころか、僕も楽しいと思っている」

「だろうな。ならばこそ、わからない」

実代は苦笑して、コーヒーを啜る。そして、ゆっくりと目を閉じて、大きく息を吐いた。

その仕草が、やりきれない様子というよりも、面倒臭いといった様子であることがわかるあたり、僕はもう実代マニアと呼べる状態なのかもしれない。

否、今はまだ恋人だ。恋人だから、ということにしておこう。次に続く言葉が僕を脅かすことすら理解できてしまうのは、僕たちが仲睦まじい恋人だからだ。

そう、信じたかった。

「あの、不破という生徒会長の差し金か」

実代が「あまり考えたくはなかったが」という顔で言った。

「決めたのは、僕の意志だけだね」

僕はすかさず、用意していた言葉を返す。実代のことだから、不破の存在が僕に別れ話をさせていることぐらい、見抜くと踏んでい

たのだ。もしかしたら、先日ロッカーに潜んでいたことすら、実代なら気付かかねない。

「不破と付き合えなんて言わないけどね。少なくとも、彼の気持ちは本物だった。真剣に実代を好いている人がいて、僕はその前で実代と手を繋ぐことは、できないよ」

「……誠二、らしいよ。まったくもって」

実代は肩を竦めて見せると、すっと立ち上がった。真っ直ぐに僕を見据えて、つかつかと目の前にやってくる。

「立ってくれないか？」

「え……あ、ああ」

一発殴られる覚悟はしてきた。流石の実代ももう少し怒るだろうと思っていたので、少々拍子抜けしただけだ。

僕が立ち上がると、まず一発。ぺしつと軽く、頬を叩かれた。ちつとも痛くない。

「実代？」

「これが答えだ、馬鹿」

馬鹿はひどいだろうと、抗議しようと思ったときには、僕の唇は実代にふさがれていた。

肩をぐつと握られて、そのままソファに押し倒される。思いがけない強い力に、抗うことすら忘れて、僕たちは今までで一番長いキスを交わした。

「真剣な不破よりも、ぼんやりとした誠二の気持ちのほうが、私にとって嬉しい。そんな簡単なことすら、誠二はわかっていない」

「けど、不破は本気なんだ。多分、実代が思っているよりずっと、ずっと真剣で」

「ならば、世の中のストーカーと呼ばれる人間は、歪んだ形であれど、これ以上ないほどに真剣だろうに。真剣か否かで恋愛をする資格が問われるならば、そもそも私たちは交際してはいけなかった。そうだろう？」

返す言葉がなかった。ぽかんと開いた口が、再び実代に塞がれる。

どうしてだろうか。別れを決意したはずなのに、実代とキスをしていると、それが段々と馬鹿げたことのように思えてくる。確かに不破の気持ちには申し訳ないが、それでもなお、僕は実代のキスを拒む気が失せていった。

「……恋とは、素晴らしいと聞いたが、ちつともそうじゃない。こんなに面倒なものだったとはな」

どこかやりきれない表情の実代がぼそりと呟くのを聞いて、僕はようやく、実代をぎゅっと抱きしめた。そして、その温もりと存在感を感じたときに、不意に目から涙がこぼれた。

「……ほんと、厄介なものだね」

僕たちは恋を知らない。

けど、もしもその前提が間違っていたのならば。

ずっと前から、僕たちはお互いに恋をしていて、それに気付いていないだけなのだった。

そうだったら、それこそ三流小説だと自嘲しながら、僕はずっと実代を抱きしめ続けた。

第八話 別れ話をしよう（後書き）

少し更新が遅れ、申し訳ありませんでした。

第九話 友達になろう

「それが答え、か」

相変わらずの文芸部室。据えた本と、コーヒーの香りが漂い、チープなジャズが流れる、僕にとつてはこの上なく落ち着くことの出来る場所だ。

本来ならば、この場に居るのは部長たる僕と、副部長にして恋人の実代の二人の筈なのだが、今日は少々面子が違う。

眼前でコーヒーを啜るのは、生徒会長であり、実代に恋をしている男。銀縁眼鏡が妙に似合う、落ち着いた風貌の不破だった。

「ああ。一度は承諾しておいて、しかもたった二日で反故にするのも悪いけどね」

僕がそう言くと、不破は苦笑して手をひらひらと振った。

「いやいや。そんなものだろう。失って初めて気付くのが、大事なモノさ。失う前に気付けた君は、僥倖だ」

あまりに穏やかに不破は、僕の反故を許した。わけがわからずに狼狽える僕を、不破はおかしそうに笑う。

「君たちは、生半可な気持ちで交際に至った。これは事実だと思うがね。結果、お互いを失いたくないと思うようになった。否、なっていたというほうがいいか。どちらにしろ、雪吹実代という女性は鷹成誠二のものだと、言えるようになった。そこに戯れの気持ちがあるとは思えない。きつかけがあることが自分自身だとも思いたくはないが、まあ、雪吹さんの幸せを願う身としては、万々歳さ」

「万々歳なはずないだろう。不幸にしても、奪いたいと言っていないだろうか？」

「不幸を願うわけではないさ。幸せなのが一番に決まっている。悔しいとも思いつし、今からでも、と思わないでもないが、男が交わした約束を、舌の根が乾かぬうちに違えるのは、君の本意ではなかったはずだ。だが、それをしたということは、それだけ君たちが、君

たちの思っている以上に強い絆で結ばれていたと言うことだろう。正直、道化を演じた気分……否、まさしく道化だな」

そう言って笑う不破の笑顔は、やはり本物だった。それだけに辛い。

「僕からこういうのもおかしいけど、不破のおかげだと思う。まだ恋愛がどんなものなのかって、はつきりとはわかってないけど、少なくとも、僕と実代は本当の恋人になれた気がするんだ」

礼にもならない。さらに苦しめるだけの言葉なのかもしれない。けれど、これははじめだと思った。本音で語った不破に対して、僕が本音を語らないというのはおかしい気がした。ありがとうとは流石に言えないが、せめて、目の前の男が単なる道化ではなかったことを伝えたかった。

「君たちは、恋人だよ。僕はそれを認めて、許せる」

それだけ言っていると、不破は満足そうに頷いて、コーヒーを啜った。

苦い顔をしたのは、コーヒーの所為だけではなかったのだろうと思う。

結局、僕と実代に目立った変化などはない。

実代が恋とは面倒なものだと言いつつたものだから、てつきり恋愛感情を知ることができたのかと思ったが、その辺りは本人にもよくわかっておらず、彼女の言葉を借りるならば、こうらしい。

「別れを切り出された瞬間、強く嫌だと感じた。離れたくない、とな。別に恋人同士でなくとも、部屋に来れば嫌が応でも顔を合わせるというのに、あのときは離れてしまうと真剣に危惧した。これが恋なのならば、本当に面倒臭いものだ」

僕が考えるに、どうやら恋愛感情とは、ひとつのものではないようだ。

実代が感じたのは、失うことへの焦りや、悲しさだ。それが恋愛感情だと定義するにはあまりに単純すぎる。

しかし、それが恋愛感情が生み出したものならば。或いは、恋愛

感情の一つであつたならば。僕たちは、答えに近づいているということになる。

「歸りに本屋に寄りたいのだけど、付き合つて貰えないだろうか」
昼休みに、クラスメイトと弁当を食べていると、突然不破が僕の所にやつてきた。

実代と別れ話をして、すぐに仲直りしたのが三日前。不破とそのことについて話したのが一昨日になるから、当然ながら僕は訝しんだ。

腹いせに文芸部を潰そうとするような男でないことはわかつている。しかし、だとすれば不破の行動はどういう理由から来るものなのだろうか。

「部活があるんだけど」

僕がとりあえずそう答えると、不破は実代ばりの不敵な笑みを見せて、眼鏡を人差し指で整えた。

「サボつて咎められる部活でもあるまい。なに、雪吹さんには既に了承済みさ」

嫌に用意周到な誘いである。たかが本屋に寄るためにそこまで手回しをするとなると、ますますもつて怪しい。

「おっと、勘違いしてくれるな。僕は別に、雪吹さんと君を引き裂こうとするつもりは毛ほどもないんだ。そんなことをしては、僕が雪吹さんに嫌われるだけさ。よもや、好きこのんで想い人に嫌われる真似はするまい」

「やつぱり、まだ好きなんだ？」

「そう簡単に消える想いなら、あのような行動には出ないさ」

不破はやけに明るく笑い、あまつさえ僕の肩に手を置いた。その親しげな態度がいつそう僕を怪訝な表情にさせるのだが、不破は知つてか知らずか、お構いなしに話しかけてくる。

「折角の縁なんだ。こうなつた以上、お互いの禍根を流して、友達になろうというのが僕の考えだ。雪吹さんさえいなければ、僕たち

はきつと、とてもいい友達になれると思ったものでね。ならば、僕たちの間に雪吹さんという存在を挟まずとも成立する絆を作ってしまえばいい。さしあたって、お互いに読書を趣味としているようだし、本屋という線は悪くないと思ったのだが」

ここまでダイレクトに「友達になろう」と誘われたのははじめてである。

確かに、不破は気性や性格をみれば、友達として過不足なくやっていけそうである。基本的にこのような手合いと仲良くなれるのは、実代で証明済みだ。

「まあ、いいけどさ。ただ、友達ってさ、なろうとしてなるものじゃないと思うんだけど」

「恋人も然りさ」

そう言われてしまうと、身も蓋もなかった。

実代にメールで確認したところ、不破がわざわざ実代に了解を得たのは本当らしい。放課後の予定を半ば強引に奪われてしまった僕は、不破と帰ることになった。

「しかし、快諾してくれるとは思わなかったよ。雪吹さんと一緒にいることを優先すると思っていたからね」

「毎日一緒だし、たまにはいいよ。それに、強引な手段を使ってまでお膳立てされたんじゃ、断るのも気が引けるしね」

別に実代と毎日いることが苦痛とはちっとも思わないが、実代と毎日一緒じゃないと気が済まないというわけでもない。

「まあ、強引だったことは認めるよ。ただ、折角気の合いそうな男がいるのに、単なる恋敵で終わるのも勿体ない。君にとっては、少々会いたくない人間かもしれないが」

プラス思考とでも言うのだろうか。きっと不破は、敵を作りながらではなく、味方を増やしながら生徒会長になり、精力的に活動してきたのだろう。

「会いたくないわけじゃないさ。どういう顔で会えばいいのかとは

思うけど」

「ならば、今までのことはお互いの意志のものと行動ということで、全てを水に流すというのはどうだろうか。僕は君と雪吹さんの関係を妬んだりしない。君は、僕に遠慮や気遣いをしない。先にも言ったが、そういう面倒なことを全てうつちやってしまえば、きっと僕たちは仲良くなれる」

不破がそれでいいのならば、敢えて僕からは何も言うまい。

本屋に到着するなり、不破と僕はお互いの好きな作家を並べあい、その微妙なズレと合致を楽しんだ。

「外国人作家の台詞を流用していたから、てっきりそっちがメインかと思っていたが、そうでもないんだね」

「当然だろう。僕は日本人で、日本の文化に染まっている。同じ文化を共有している人間が書いた文章を嫌う道理はない」

「でも、ライトノベルまで好きだとは思っていなかったよ。僕は、そっちはあまりわからないんだけど」

「年相応の読み物だとは思うがね。得てして、文章や構成、ストーリーに難があると思われがちだが、冒険活劇などになると、多少なりシンプルなほうが映えることもある。すべての本がそうだとも思わないが、それはライトノベルに限ったことでもないだろう？」

不破はその役職としては当然ながら、喋るのが上手い。薦められるがままに僕は三冊ほどのライトノベルを購入することになった。

「この作者はとても良いよ。外連味に溢れているのに、嫌らしさがない。むしろ、それが何よりの味になっている」

「ふむ。ならば、一冊読んでみようか。君が持っていない作品はあるか？」

不破は僕が指さした本をすぐに手に取り、懷に抱えた。

「気に入ったら、君の持っている本も借りてみよう。勿論、僕がこれを読破すれば、君に貸すよ」

「いい案だね」

実代とも繰り返したことだが、不破と実代と僕は、みんな少しずつ趣味が違う。友達が増えて、まさか読める本の種類まで増えるとは思っていなかった。特に、不破の好むライトノベルは図書館にも置いていないので、試してみようにも手が出にくかったのだ。

僕たちはそれからしばらく本屋をうろつき、いざレジに並ぼうとしたところで、平積みになっている一冊の文庫本に目がとまった。
『恋』

表紙にはいい加減な水彩画でぼんやりと、二人の男女が手を繋いでいる様子が描かれている。たった一文字のタイトルは、隅の方にちょこんと表記されていて、一見するとそれがタイトルなのか解らない。

それでも、僕が一目でタイトルだとわかったのは、その表紙を幾度となく眺めたことがあるからだった。

「これが、君と雪吹さんの縁^{えにし}か」

おそらく、吉野先生から聞いたのだろう。不破は神妙な面持ちで『恋』をじっと眺めていた。僕は頷いて、不破と一緒にその文庫本を眺めた。

僕と実代が付き合うことになった理由。それがこの『恋』だ。あまりにストレートなタイトルは、この作品の本質であると同時に、一種の伏線となっている。そこに描かれているのは、確かにとある高校生の恋物語であるが、その他にも、友情や、進路や、様々な悩みなど、高校生らしい複雑な感情が鮮やかな文体で綴られている。幾度、読み返しただろうか。今までで一番多く読んだ本なのかもしれない。

恋という感情を知りたかった。知らなければならぬという義務感よりも、知りたいという欲求のほうが強くなっていた。

そして、つい最近まで既に掴みかけていることに気付かないでいた。

全ては、この一冊の本から始まったのだ。

「本から恋をみつけた、とでも言うのだろうか」

不破は少しおどけた調子で言った。

なるほどと思いながらも、その言い回しに少しだけ、齟齬を感じる。

少しだけ違う。そう、実代の様子がおかしかったときのような、ほんの僅かな違和感だ。僕たちは、本から恋をみつけたわけじゃない。

「本からみつける恋の文字、と言うほうが正しいかな」

ふと、背後から聞き慣れた声がかかり、僕と不破は同時に振り返った。誰であるかなど、今更言うべくもないだろう。

微かな違和感を打ち消す、その凜とした声の響きが耳に心地良かった。

「……言い得て妙と思ったのだが？」

不破が少しだけ肩を竦めて文庫本を手にとった。実代は答える気がないのだろう。少し挑戦的な目で、僕を見るだけで何も言わない僕に、答えさせたいのだろう。大丈夫だ。不破の言葉に覚えた違和感は、実代が消してくれた。その差は、たった一つだ。

「僕と実代は、恋愛感情を本からみつけたわけじゃない。あくまで恋という文字だけだよ。この本はきっかけに過ぎない。僕たち自身の行動や、不破という存在がなければ、未だに文字でしか認識できていなかった」

僕の説明に、不破は納得したように頷き、実代は「我が意を得たり」とでも言いたげに頷いた。

「ついでに言えば、この表紙のタイトルがどこにあるのか探すのに手間取らないほど、熟読したいうところにも掛けている。表紙通り、恋をみつけるのは、中々に難しかった」

からからと笑う実代に、不破は苦笑した。そして、手に取った『恋』をそのまま懷に抱えて、レジへと並ぶ。

「不破？」

「今更、僕は本から恋という文字はみつけない　否、みつけれない。既に知っているものを、改めて発見するというのは存外に難

しいものだからな」

不破の表情に、曇りはなかった。むしろ、いつになくすっきりとした表情だった。

「ただし、知っているつもりで、知らなかったものを、みつけることはできるかもしれない。みつけたものが文字だとしても、君たちのように、そこから本物にたどり着けるかもしれない」

不破はそれだけ言っ、会計を済ませるために僕たちに背を向けた。

僕が続いて並んだときには、手早く済ませたのだろう。不破はすたすたと歩き出していた。

「今日は楽しかった。雪吹さん、鷹成を借りてすまなかった。心配だったのか、会いたくなっただけなのかは知らないが、僕はこれで失礼するよ。また明日、学校で」

最後に振り返り向き、それだけを言い残して不破は先に行ってしまった。僕と実代は目を見合わせてから、しばらく不破の後ろ姿を見送った。

「それで、どうして来たの。本屋に寄るって言ったから、まさか偶然じゃないよね」

「なに。不破の言ったとおりだ。今日はほとんど会っていなかったから、誠二の顔を見たくなっただけ」

果たして、本気なのか、冗談なのか。実代のことは大抵わかるのだが、今回は判別し難い。きつと、実代もよくわかっていないのだろう。それが恋の欠片だということを、僕は知っている。

「……ところで、不破も律儀だな。あの本なら、誠二も私も持っているのに、わざわざ買うとは。貸してくれの一言ぐらい、あってもいいものを。本の貸し借りはしない主義か」

実代が不思議そうに首をかしげた。なるほど、それは実代にはわからないらしい。僕はすぐにわかった。

「不破のけじめだよ。僕と実代が持っている本をわざわざ買うこと

で、僕たちの『恋』には手を出さないって伝えたんだ。貸し借りは、別の本で約束したしね。たぶん、実代への想いにも、はじめをつけたんじゃないかな」

相変わらず、不器用だと思う。けど、それと同じくらい小粋なメッセージだとも思う。

「なるほど、説明されるまで気付かなかった。男の友情に言葉はいらないもののだな」

実代の言葉に、逆に僕がひとつ気付いた。僕はもしかして、かなり鈍感なのだろうか。

不破。僕たちはもう、友達になれたみたいだよ。

心の中でそれだけ呟いて、僕は実代の手を取り、いつも通りの帰路へと向かった。

第九話 友達になろう（後書き）

今回の話で誠二が不破に薦めた作家は、私の目標であり、誰よりも敬愛する浅田次郎氏という設定です。

日本語の真髄と、コメディの楽しさと難しさ。そして何よりも小説の素晴らしさを教えてくれた憧れの作家です。
是非、読んでいただければと思います。

第十話 感想文を書こう

僕たちが交際を開始して、一ヶ月が経った。

交際の節目であるのと同時に、一ヶ月というのは、もう一つ大きな意味を持っている。僕と実代が交際を始めるきっかけとなった読書感想文の〆切が、間近に迫っているのだ。

僕たちは恋愛の何たるかを、結局知ることとは出来なかった。恋愛とはどのようなものだと思われる、曖昧に首を捻るのが精一杯である。それでも、知らないという答えはなくなった。ただ、幾分の進歩が見られるのだが。

「兎にも角にも、書くしかあるまい」

実代の言葉に、ペンを握ってみたが、思い浮かぶことと言えば、実代との穏やかな日々ばかりである。恋愛感情を知ること、何かしらの共感が生まれればと思ったが、僕と実代の恋愛と、『恋』の主人公たちの恋愛は、大きくかけ離れすぎている。彼らは、多くの事件や感情の狭間の中から、真実の愛を見いだした。それに比べて僕はどうかろう。

大きな事件と言えば、せいぜい不破が実代に告白したことぐらいであり、確かに僕たちの気持ちは大きく揺れ動いたのだが、僅か三日でケリがついた。恋愛とは何かと考えるにはあまりにも短すぎたし、結果として不破と友達になるという、何とも盛り上がり欠ける展開になった。

「やはり、私たちでは三文小説にしかないか。はじめて読んだときよりは、まあ、行動にも理解できる節はあるのだが、涙を流して感情移入できるほどではないな」

実代の冷静な感想が、僕たちと『恋』の温度差を明確にする。一体、どう書けばいいのだろうか。

「……恋愛は、人それぞれということ、なのだろう。しかし、それでは感想にならない。誠二と付き合ってみるというのは、我ながら

妙案だと思ったのだが、この結果ではな。すまないな。茶番に付き合させた」

「妙案だったよ。それに、僕は茶番に付き合ったつもりはない。僕が付き合ったのは、実代だよ」

「巧く纏めたつもりかもしれないが……いや、そう言われると嬉しいのは確かだな」

僕たちは顔を見合わせて、苦笑した。

得たものは、恋人。幸せな時間。穏やかな気持ち。それに、妙な友達も。

それらは、素晴らしいものだと思う。この感想文がなければ、僕たちはずっと、ただの読書仲間だっただろうし、不破と仲良くなることもなかった。恋愛なんて興味がないまま、ずっと生きていったとさえ思う。

それでも、一番大事だと思っていた場所。この文芸部を存続させる鍵には、どうやら、ならなかったらしい。

結局、僕たちは散々に悩んだ挙げ句、一般論に多少色をつけた、あまり出来が良いとは言えない感想文を書き、吉野先生に提出した。そんなものを仕上げるだけでも、僕たちは徹夜をして、ふらふらになってようやく書き上がったものだった。吉野先生は目を通すことなくそれを仕舞い、僕たちを見て嬉しそうに笑った。

「終わった、かな」

吉野先生に提出して、文芸部に戻って一息ついたところで、実代がぼそりと呟いた。

「終わった？」

「自分で書いたものを悪く言うのも、主義に反するがな。あの感想文は駄目だ。平凡すぎる。賞どころか、審査員の印象にも残らないだろう」

「……まあ、ね」

賞が取れない。そうになると、おそらく文芸部は無くなるだろう。

不破と実代の会話で、結果だけを見ないでくれと言ったが、それでも結果が重視されないはずがない。よくて、同好会への格下げというところだろうか。部室が奪われては意味がないので、そうなる僕たちが所属する意義はない。

「さて、そうなる。私たちの恋愛にも、終止符を打つということになるかな」

実代の言葉は、予想していたものだった。

最初に。この奇妙な交際がスタートするときに考えていたことだ。感想文が書き終われば、僕たちの関係も終わる。感想文のための交際だったのだから、当然の成り行きであり、言わば予定調和だ。

実代はにこりと笑い、朗々とした声で言い放った。

「実に楽しい一月だったよ。恋愛を知らない私たちが、恋愛に取り組む馬鹿馬鹿しさが気に入ってたが、次第にそれが本物になっていった。感想文には繋がらなかったが、恋を知ることが出来た」

「うん。聞いていた恋愛。胸が切なくなる、高尚な感情ってやつとは違ったけど、本当に楽しかった。最初は妙な展開になったなあ、としか思わなかったけど、いざ付き合ってみると、穏やかで、心地よくて、これが恋愛っていうものならば、素晴らしいものだって思った」

実代は満足げに頷いて、すっと立ち上がった。

「できれば、感想文も大層なものを仕上げ、ハッピーエンドといきたかったものだ」

僕も立ち上がり、実代に近づいた。

「仕方ないよ。色んな順序を蹴り飛ばして、いきなり恋人になったんだ。僕たちじゃあ、やっぱり他人の恋愛には共感なんてできないさ」

それでも、僕たちだけの恋愛になれば、最大限の理解が出来る。

実代が言ったとおりだ。感想文にはならないが、恋愛の形なんて人それぞれで、あまりに滑稽な僕たちの恋愛劇も、決して間違ったものではなかった。少なくとも、僕は実代が好きだと思っている。

それが他人の持つ恋愛感情とは違っても、最早、どうでもいいことだ。

共感しなければならぬという最大の懸念は、先ほど提出した感想文と一緒に、消えてしまったのだから。

「そこで、だけどさ。本当なら、これで僕たちの恋愛は終わりってことになるんだろうけど、一つ提案があるんだ」

僕はおもむろにそう言って、実代の目を真っ直ぐと見た。

滑稽だと思う。何が滑稽かというと、わざわざこんな儀式をしなければならぬ、僕たちが、だ。

「ふむ。流石は部長だな。交際するという部員の意見を取り入れながら、最後にはきちんとまとめてくれる」

わかつてはぐらかしているのだろう。言ってしまうえば、これは儀式ですらない。ただの寸劇だ。敢えて、僕を部長と呼んだ実代は、僕が即興で描いたストーリーをすぐに理解したのだろう。いや、同じタイミングで、同じストーリーを作り上げたのかもしれない。

「これは、部長としてじゃない。鷹成誠二として。部員ではなくて、雪吹実代という女の子に対しての提案だよ」

我ながら、あざといセリフだと思う。しかし、それでもこのわかりきったやりとりは、僕たちにとって必要なのだ。

「感想文を書くための交際は、終わった。けれど、それとは関係なく、僕は実代と交際を続けたいと思う。提案というより、お願いかな。僕と、別れないでくれないか」

本来ならば、こんなやりとりがあるなどと、予想はしていなかった。「これでお終いか。案外楽しかったね」とても笑い合いながら言って、読書仲間に戻るはずだった。

しかし、今となっては、そんなことを言えるはずがない。実代とは読書仲間としてではなく、恋人として、これから先も一緒にいたい。それが、この一ヶ月で僕に起こった、最大の変化だろう。

実代は逡巡するかのよう、腕を組んでじっと僕の目を見ていた。芸が細かいが、普段の実代はこんなとき、不敵に笑うので、わざと

らしくしか映らない。

「……奇遇だな。誠二が言わないならば、私から言おうと思っていた。前にも言ったが、誠二との関係を失うのは、惜しい。この上なく、な」

ようやく、実代がにやりと不敵に笑った。僕も肩の力を抜いて、つられて笑った。

「答えを聞きたい」

「無論、イエスだ。他の選択肢など、無い」

僕たちは気付けば、キスをしていた。

あまりにも陳腐なキスだと思う。まるでドラマのワンシーンのような、お手軽で予定調和のようなキスだ。

けれど、それが予定調和であることが、何よりも嬉しい。

本来なら、読書仲間に戻るはずだった。そんな予定が、何時の間にやら、このまま恋人として過ごすという、正反対のものに変わっていたのだ。胸がドキドキするなんてことはない。唇の温かさも、柔らかさも、全てが今までどおり。物語のような、大恋愛なんて僕たちには必要ない。穏やかで、一見するとつまらなさそうな関係が、心の底から幸せなのだ。

「文芸部がなくなっても、いいと思うか？」

キスを交わした後、実代が試すように僕を見た。

「実代と一緒にいいよ　なんて言えたら、とっくに文芸部なんて辞めてるさ」

「それでこそ、誠二だ」

おそらく、文芸部は無くなる。ならばこそ、最後までこの場所で、実代と一緒に過ごしたい。

「ひよつとすると、奇跡が起こるかもしれないぞ。御都合主義で、ありきたりで、三文小説にしか出てこない、陳腐な奇蹟が」

「それでも、僕はハッピーエンドを願うさ。御都合主義でいい。ありきたりでもいい。バッドエンドで芥川賞を取るより、ハッピーエンドで売れない三文小説のほうが、よほどいい」

誰か、この物語を肺炎にしていってやってくれないか。
そんなことを考えながら、僕たちは心ゆくまで、この文芸部室で、
ひたすらに穏やかな時間を過ごした。

第十話 感想文を書こう（後書き）

次回が最終話となります。

最終話 ハッピー・エンド

楽しい時間というのは、得てして過ぎ去るのが早い。

会心の出来とは口が裂けても言えない感想文を提出した僕たちは、文芸部の行く末を案じながらも、一月ばかり、穏やかな時を過ごしていた。

休みの日にはデートに繰り出した。手を繋いで歩いて、喫茶店で休憩して。

たまにセックスもした。相変わらず実代はそういうときだけ、妙に恥じらった。

キスは、あまりしなかったかもしれない。お互いが傍にいうことだけで、心が安らいだので、それ以上を求めなかったのかもしれない。

恋人という存在が、万人にとって同じとは思えない。それでも、僕たちは世間一般と同じことをしながらも、明らかに違うように思っていた。

ドキドキなんてしない。切なかったり、強く会いたいと願ったりもしない。ただ、穏やかな日常の象徴として、相手がいるだけだった。

だが、そんな日常が続くかと言われれば、そうではなかった。諸行無常というのは仏教の言葉らしいが、なるほど、中々言い得て妙である。全てのものは、変わらずにはいられない。

「残念だけど……廃部が決定したわ」

吉野先生に呼び出されたのは、五月も終わりを迎えようとした、暖かい日のことだった。

半ば覚悟を決めていただけに、驚きは少なかった。それでも、最高にして唯一の読書場を奪われるのだと思うと、シヨックは大きい。

「会議では色々揉めたみたいだけど、最後は不破君 生徒会長が、

潔く廃部にしておいて言ったらいいわ。彼の所為ではないけどね。他の部を納得させるには、それしかなかったんでしょ」

なるほど、不破らしい。公私を混同せずに、正しい判断を下したわけだ。不破を恨むつもりは毛頭ない。他の部の人間達もだ。彼らは実に真つ当な正論を述べたに過ぎない。

この先、どこで本を読もうかと考えながら、僕は吉野先生に一礼して、その場を去った。

「やはり、無理だったか」

実代の反応は、淡々としたものだった。彼女も僕と同じで、覚悟をしていたのだろう。ショックは大きいだろうが、それを敢えて表情に出すつもりはないようだ。

「やれやれ。どこで、本を読めばいいのだろうな」

実代は苦笑して、部室に備え付けられてある本棚を見渡した。考えていることが、本当に全部同じに思えて、僕もつられて苦笑いで返してしまった。

「誠二は、家は兄弟がうるさいのだったな。喫茶店に行く金も無く、図書館は落ち着かない上に遠い。世知辛いとはこのことか」

「そういえば、実代はどうして家で本を読まないの？」

実代の家には、一度行ったことがある。落ち着いて本を読めそうな部屋だという印象があったのだが。

「確かに、姦しい兄弟はいないがな。両親の喧嘩が絶えなくて、おちおちと読書なんてできないさ」

「初耳だね」

僕の家は、基本的にとてうるさいが、それも家族仲がいいからうるさくできるのだ。喧嘩も時折するが、お互いに仲が良いとわかつているからこそできるような喧嘩だ。

「家族仲が悪いわけではないさ。喧嘩は親にとって、コミュニケーションの手段であって、それ以外の何物でもない。私もそれとわかつているから放置しているが、如何せんうるさくて敵わない」

結局、僕たちはとことん似たもの同士なのだろう。喧嘩がコミュニケーションツールとして役立つというのは、中々興味深いが、実代が気にしていないならば、敢えて僕がそれを心配する必要もない。「そんなことよりも、これからどうなるのだろうな。よもや、文芸部が潰れたからと言って、私たちの関係も潰そうなどとは思わないが、正直なところ、この場所で誠二とのんびりとするのが、何よりも楽しい。思い出の場所にするのは、卒業してからにしたいのだが」「うん。卒業したら、幾らでも方法はあるんだけどねえ」「ほう。あるのか？」

「大学に進学するつもりだけど、ちょっと遠いんだ。下宿しようと思っただけど、そこならば誰にも邪魔されずに、理想の環境を作れると思うからね。実代も一緒に住むかい？」

「それはいいな。そういう未来があるならば、ここからの二年ぐらいいならば、我慢もできるかもしれん」

起こるかもわからない未来について語らうのは、楽しかった。

実代と一緒に生活をする。一緒に登校して、サークルにも入らず、帰ってきたら読書をして、僕が作る美味しくない晩御飯を食べて、のんびりと語らう。まさか、同居をお互いの両親が許すとも思えないが、いつかそんな生活が出来ればと、心から願ってしまう。

「それでも、やはりこの場所は惜しい。二年は、きつと長いのだろうな」

「本さえ読めれば、あつという間なんだろうけどね」

僕たちは苦笑してから、最後になるかもしれない文芸部での穏やかな時間を過ごした。

生徒会からの正式な通告があつたのは、翌日だった。

放課後、部長である僕と、副部長の実代が生徒会室に呼ばれた。

対応したのは、生徒会長の不破だけだった。

「いや、すまないね。他の者は皆、出払っていてな。もうすぐ体育祭があるので、僕一人で説明させてもらおうよ」

不破はいつもと変わらぬ調子で僕たちにソファに座るように言い、向かい合う形で自分も座った。

「今回のことは、残念だった。僕自身が最終的な決断をしたので、僕がそういうのも、少々おかしい気もするけどね」

「なに、生徒会長の決断は、生徒の総意だろう。君を恨む道理はないさ。それに、残念だと言ったのも、本当なのだろう。憎めないセリフを言うものだ」

実代が不敵に笑う。不破はやれやれと肩を竦めて、コホンと咳払いをひとつした。

「僕個人としては、文芸部は存続させたかったのだがね。他の部からの反発が強すぎた。本日を以て、文芸部は廃部となり、以後、あの部室は資料室として、図書室に入りきらない本を格納する場所にすることにした。幸い、本棚などの備品は揃っているからね」

あの場所に、本があるだけでも救いになる。というところだろうか。改めて廃部だと言われると、急に現実味を帯びてきて、僕は自然と肩を落とした。実代も隣で、大きな溜息をつく。

「どうにもならんか？」

「どうにもならないね。これは決定したことだ。文芸同好会を設立するならば、相談には乗るがね。部室を使うことはできないが」

「部室があつたから、入部したわけだしね。同好会を作る理由がないさ」

申し出を断ると、口から自然に溜息が漏れた。

もう、あの部室で本を読むことは出来ない。あの場所で、実代と語らうことが出来ない。

もう、あの穏やかな時間は、帰ってこないのだ。

失うことの辛さは、かつて実代と別れを決意したときに味わっている。実代を見ると、じつと俯いて、何かに耐えるように拳を握りしめていた。その様子を眺めていると、不意に涙がこぼれた。

「鷹成、泣くことはないだろう。君と雪吹さんが別れるわけでもないに。ただ、文芸部が潰れたただけだ」

不破の言葉に、実代が物凄い勢いで立ち上がり、不破の胸ぐらを掴んだ。

「お前に何がわかる。あの場所が、私たちにとってどれほど大事なものか、お前にはわからないだろうが！」

実代が声を荒げるのを、はじめて見た。

目をつり上げて、今にも不破を殴り飛ばそうとしているかのような怒気を孕んで。

「わからんさ。君たちが恋愛感情をうまく捉えられないように、僕にも文芸部にこだわる理由がわからない」

不破は冷静な声で言い、実代の手をゆっくりと解く。それから、不意にニヤリと笑い、僕を見た。

「まだ話は終わっていない。話半ばで感情的になるなど、君たちらしくもないな」

「……どういう意味？」

「言葉通りさ。雪吹さん。鷹成に対する想いの強さも、文芸部への執着もよくわかったから、座ってくれないか」

不破の言葉に、実代は釈然としない様子ながらも、再び僕の隣に腰を降ろした。まだ怒りは収まらないのだろう。不破を睨み付けたままだった。そんな実代を気にした素振りもなく、不破は淡々とした様子で言葉を続けた。

「いいかい。ここから先は僕からの　いや、生徒会長としての僕からの提案なのだけだね。資料室を作成するにあたって、管理する人間が必要になるんだ。まさか司書をもう一人雇うわけにいかないし、出来れば、生徒にその権限を持ってもらいたいと思っている」

思わず、僕と実代は不破の顔を見上げた。

「生徒会の人間が務めてもいいのだが、ご覧の通り、僕以外は出払っているというこの状況だ。会長の僕が留守にするわけにはいかないし、かと言って人員を割くほど暇でもない。それに、本を扱うわけだから、本を愛している人間のほうが都合が良い」

実代が、不敵な笑みを浮かべるのがわかった。そして、このとき

ばかりは僕も、実代と同じようにニヤリと笑ってしまった。

「後は、言わなくてもわかるだろう。元・文芸部の部長と副部長。今はその任を無くしたが、あの部屋をよく知っているし、これ以上ない人選だと自負している。本人達の了承さえあれば、すぐにでも任命したいと思っているのだが」

不破はそれだけ言って、やれやれと溜息をついた。

文芸部は潰れる。しかし、僕と実代は再び、あの部屋にいても良い。そんな状況が生まれるなんて、ちつとも想像していなかった。

「不破……君ってヤツは……」

「怒って損をした。まったく、意地が悪いのに人が良いとは、ややこしい男め」

「きちんと流れ通りに説明しただけさ。それで、鷹成君と雪吹さん。資料室の管理のほう、お願いできるかな？」

不破の問いかけに、僕と実代はお互いの顔を見た。実代は相変わらず、不敵に微笑んでいる。僕もきつと、いつも通りの顔をしているのだろう。そして、答える必要すら感じない回答を、僕たちは言う。

「不破の頼みだしね。謹んで引き受けるよ」

「そういうことだ。生徒会長の頼みとあらば、致し方ない」

「……快諾してくれて嬉しいよ」

やれやれと肩を竦める不破に、僕たちはもうどうしようもなく嬉しくなり、そのまま飛びついてしまった。

それから、一週間ほどは少々大変だった。

僕と実代はいつの間にか生徒会役員という肩書きを与えられ、資料室管理という役割を言い渡された。

図書室の蔵書が飽和状態というのも本当で、本を大量に移動して、虫干しをしたり、分野別に分けたりと、比較的真つ当な仕事をさせ

られた。

それでも、いざそれが終わってしまうと、後は普段と変わらない。少々手狭になってしまったが、ソファとコーヒーのドリッパーはある。ラジカセもこっそり流している。資料室というのは名目だけで、実際は普段から読まれない本を格納しておく場所なので、蔵書を探して人がやってくるなど、滅多にない。

つまり、本当に名目だけが変わって、やっていることはちっとも変わらないというわけで。

「実代。図書室から来た本だけどき。面白のいっぱいあるよ。古いからってバカにできないね」

「ふむ。折角だから、片っ端から読み尽くすとするか。二年は長いと思ったが。中々に短くなりそうだ」

僕たちも相変わらず、文芸部室改め資料室で、穏やかな時を過ごしている。

「しかし、流石にここではもう、良俗に反する行為はできんな。鍵を閉めるわけにもいかんし。不破のやつめ、何が忙しくて人員が割けないだ。しよっちゅう顔を出してはコーヒーを呑んでいく。おいそれとキスもできん」

「まあ、いいんじゃないかな。不破の持ってくる本、けっこう実代も気に入ってるみたいだし。それに、別にこの場所でする必要もないさ。二年も待てば、飽きるほどできると思うよ？」

僕たちは、きつとこれからもずっと一緒だ。確証は無いし、恋人同士の絆は得てして壊れやすいと聞く。それでも、一緒にありたいと願うのが、恋人たる所以ゆえんだろう。

「そう言えば、両親に同棲の許可をもらったぞ」

「……そういうのは、普通言わないと思うんだけど」

実代もやはり、考えていることは同じのようだ。この先に、僕たちが別れることなんて、幾らでも考えられるはずなのに、そんなことは構いやしない。

「いい加減に恋人ぐらい作れと言われたからな。思わず将来を誓っ

た男がいると返してしまった。大学からでも同棲したいほどに、と付け加えてな」

「将来を誓うって……まあ、語弊がありすぎるけど。それもいいね」
今、僕たちは恋愛という感情を胸に抱いている。

思いつきのような未来予想図ですら、現実にてきてしまいそうなほど、恋をしている。

「さぞかし怒られるだろうと踏んでいたが、あの親は娘を一体、何だと思っている。手を叩いて喜ばれた。あろうことが、娘がようやく女らしくなってきたとさえ言われた」

「順風満帆ってやつじゃないかな。僕の両親も最近、僕に恋人が出来たって気付いたみたいだね。家が狭いから、彼女と同棲してでも大学生になったら下宿しろだってさ」

もし、これが物語であれば、やはり肺炎に罹っている。

今ならばきつと、僕たちは窓を開け放って、世界に向けて愛しているとと言えるだろう。

僕たち自身は、はしかに罹り。物語は肺炎に罹り。病人ばかりのこの場所から、臆面もなく愛を叫ぶことができる。

「ふむ。そう考えると、やはり二年は長いな」

愛を叫ぼう。狂おしくなくて良い。ただ、隣にいてだけの幸せを。「長いほうがいいよ。この場所で、実代と一緒に過ごせるなら、長いに越したことはない」

この曖昧で臆気おぼろげだけど、安心できる存在を。

「……本当に、誠二は不思議だ。これだと、長くても短くても幸せじゃないか」

僕たちがみつけたものを。

「まさか、今から言う言葉を、口にする日がくるとは思っていなかった」

ただ、世界に向けて言うよりも、まずは目の前の恋人に。

「ほう。どんな言葉だ？」

僕の初恋の人。

「ひどく陳腐で、ありふれた言葉だよ」

僕に恋を教えてくれた人。

「ふむ。随分ともったいぶる。何なら、私から言おうか？」
僕が恋を教えた人。

「けっこう緊張するんだよ。大丈夫、僕から言うから」
一緒に恋を探した人。

「ふむ。ならば、心して聞こう」

雪吹実代という恋人に、この言葉を最初に伝えたい。

「……実代。愛してるよ」

「うむ。私も誠二を愛している」

実代は不敵に微笑み、それから少しだけ頬を朱に染めた。

最終話 ハッピー・エンド（後書き）

拙作にお付き合いいただき、ありがとうございました。皆々様の佳き恋を、この物語の結とさせていたただきたいと思います。

2008年 4月29日

春の夜が明ける頃。白闇に光る星を眺めながら。

伊達倭

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6290d/>

本からみつける恋の文字

2010年10月8日12時48分発行